『バシェ』訳註（1）
――マシャン・ドムパキェの失脚――

津　曲　真　一

はじめに

『バシェ』〔*sba bzhed, dba' bzhed*〕は，8世紀に古代チベット（吐蕃）王国を統治したティソン・デツェン〔khri srong lde('u) btsan〕王時代の王室の様子を記録したと伝えられる史書である。その内容の中心は，当時のチベット王室と中国・インドをはじめとする隣接諸国との宗教上の交流，およびティソン・デツェンが仏教の国教化を企てた後，チベットに仏教が定着するまでの経緯に関する叙述に置かれている。ティソン・デツェン王治世下の古代チベット王国は，同国が軍事・文化両面において興隆を極めた時期にあり，また宗教史の観点から見れば，チベットの在来宗教と中国からもたらされた宗教伝統の教勢が次第に衰退し，チベット宗教界が急速にインド仏教へと傾注する時期でもある。そのため『バシェ』の研究は，古代チベット王国と隣接諸地域との宗教上の交流関係を見る上でも，また同国における仏教導入の経緯を辿る上でも重要な意義を持っている。

筆者はこれまで，古代チベットにおける仏教導入の経緯，及び在来宗教と新来の宗教伝統の相剋に関する後世の歴史家たちの表象，またそうした表象の一形式としての史書の中に歴史家たちの〈意図〉が如何に反映されているかという問題に対する関心から，チベットの古代史に関する諸言説について研究を行ってきた[1]。『バシェ』の記述は，プトゥン・リンチェントゥプ〔bu ston rin chen grub, 1290-1364〕，パウォ・ツグラー・テンワ〔dpa' bo gtsug lag phreng ba, 1503-1564/66〕，ガワン・ロサン・ギャムツォ（ダライラマ5世）〔ngag dbang blo bzang rgya mtsho, 1617-1682〕他，多くの仏教徒史家たちの手に成る歴史書の中で引用・参照されており，これらの仏教史書については既に一定の研究の蓄積が認められるが，これまで『バシェ』そのものに関する包括的研究が十分に為されてきたとは言い難い。こうした研究状況に鑑み，本研究では『バシェ』の包括的研究へ向けた一つの準備作業として，これから数回に分けて同書の訳註を試みるものである。

1．資料の特徴と研究方法

『バシェ』の原本の成立は9世紀頃に遡るとも伝えられるが，その後，様々な附加・潤色が施されて今日の形に到った可能性が高く，その成立過程・作者については未だ不明な部分が多

---

1)　その成果の一部として，拙稿「神の国，人の国―古代チベットにおける仏教導入の物語」,『宗教史とは何か（上）』(LITHON，2008年，pp.305-345）がある。

い。先ずその作者については，ティソン・デツェン王政下で大臣として活躍したとされるバ・セーナン〔sba (or, dba') gsa'i snang〕とするもの，バ・セーナンとティソン・デツェンの共作であるとするもの，シャーンタラクシタのもとで受戒しチベット初の出家僧となったとされるバ・ラトナ〔sba ratna〕とするものという三説があり，これに加えて，バ・ラトナとバ・セーナンは同一人物であったとする立場がある。この他，『足の付いたバシェ』（後述）の作者についてはカダム派のラマが編纂したという伝説もあり，その作者については未だ検討の余地が多く残されている。

ゲオルグ・レーリッヒ（George N. Roerich, 1902-1961）の研究[2)]に依れば，『バシェ』は本来，『ギャルシェー』〔rgyal bzhed〕と『ラシェー』〔bla bzhed〕と呼ばれる他の二つの文献を合わせた一つの書物の一部分であったが，『バシェ』を除く二つは散佚してしまった。更に『バシェ』にはその後，真性のもの（『清浄なバシェ』〔*sba bzed gtsang ma*〕）と改竄されたもの（『足の付いたバシェ』〔*sba bzhed zhabs btags ma*〕）という二種が現れたが，前者は失われてしまった。従って今日確認できるものは『足の付いたバシェ』のみであり，本研究において訳註を試みるのもこの『足の付いたバシェ』である。但し，トゥンカル・ロサンティンレーの研究に依れば，『清浄なバシェ』とは，その末尾にティソン・デツェン没後の王統，即ちヤルルン王家第39代王ムネ・ツェンポ〔mu ne btsan po, 762-797〕から第42代王ランダルマ〔glang dar ma 'u dum btsan po, 803-846〕までの歴史が附加されているものを指しており，また『足の付いたバシェ』は，パドマサンバヴァの事績に関する記述を含む書物であり，14世紀に活躍した埋蔵経発掘者オギェン・リンパ〔o rgyan gling pa〕が発見したと伝えられる『五部遺教』〔*bka' thang sde lnga*〕の記述と異なる内容を含むという理由から「足の付いた」ものと呼び慣わされるようになったともされることから，両書は単に成立年代の観点から分けられたものではないことを留意する必要がある[3)]。尚，『清浄なバシェ』，及び『ギャルシェー』〔*rgyal bzhed*〕と『ラシェー』〔*bla bzhed*〕は，16世紀の学僧パウォ・ツグラー・テンワが著した『賢者喜宴』にほぼ完全な形で引用されているとも伝えられる。またガワン・ロサン・ギャムツォ〔ngag dbang blo bzang rgya mtsho, 1617-1682〕の『西蔵王臣記』〔*bod kyi deb ther dpyid kyi rgyal mo'i glu dbyangs*〕にも『バシェ』の引用・検討が見られるが，彼の『バシェ』の検討・解釈には同書に対する批判的な姿勢が看て取れ，『バシェ』に対する彼の評価は後世の歴史家たちの『バシェ』観に少なからず影響を与えたと考えられる。

『バシェ』には今日参照できるものとして2種の版がある。一つはロルフ・アルフレッド・スタンによる校訂版（R. A. Stein 〈ed.〉, *Une chronique ancienne de bSam-Yas: sBa-bzed, edition du texte tibetaine et résumé française*, Paris: Bibiotheque de l'lnstitut des Hautes Etudes chinoises, Textes et Documents. 1961. 以下，*Bzh A*とする）であり，この版については後にジンパ・ギャムツォによる更なる校訂版がインドから出版されている（sbyin pa rgya mtsho 〈ed.〉, *btsan po khri srong lde*

---

2) George N. Roerich, *The Blue Annals*, Motilal Banarsidass, 1988［1949］, I-v.

3) dung dkar blo bzang 'phrin las, *dung dkar tshig mdzod chen mo*, krung go'i bod rig pa dpe skrun khang 〈東嘎洛桑赤列『東嘎藏学大辞典』中国藏学出版社〉, 2002, pp. 1574-1575.

btsan dang mkhan po bo dhi sa twa slob dpon padma'i dus mdo sngags so sor mdzad pa'i sba bzhed zhabs btags ma, Delhi: bod gzhung sehs rig dpar khang〈Sherig Parkhang, Tibetan Cultural & Religious Publication Centre〉, 1996〈1968〉. 以下，*Bzh B*とする）。そしてもう一つは，チベットで新たに発見されたとされる別の版であり，これについては既にパサン・ワンドゥとヒルデガード・ディームベルガーによる英訳研究（Pasang Wangdu and Hildegard Diemberger, *Dba bzhed : the royal narrative concerning the bringing of the Buddha's doctrine to Tibet*, Verlag der Osterreichischen Akademie der Wissenschaften, 2000. 以下*Bzh C*とする）が発表されている。*Bzh C*は*Bzh A*・*Bzh B*に較べ記述が簡潔であるが，*Bzh A*・*Bzh B*には見られない記述が含まれており，また，*Bzh A*・*Bzh B*がティデ・ツクツェン王以降の歴史を叙述するのに対し，*Bzh C*はソンンツェン・ガムポ王時代の事項に関する叙述を含むという違いがある。またヒルデガード・ディームベルガーは，*Bzh C* は*Bzh A*・*Bzh B*よりも成立が古いと主張している。

本研究ではスタンによる校訂本（*Bzh A*）を底本とし，ジンパ・ギャムツォによる校訂本（*Bzh B*）を参照しながら訳註作業を進める。両者はほぼ同一の内容を持つものであるが，校訂に若干の相違が認められ，私見によれば*Bzh B*のほうが*Bzh A*よりも優れている。また本研究では，『バシェ』に記される内容と関連する事柄について，他の史書に見える記述を註に記すことにした（各文献の略号は本論の文末に附す）。これらの文献は『バシェ』の記述に直接的な関連性を持つと証明されたものではないが，同書の記述を他の文献の記述と比較するための準備作業としての意味を持つものである。尚『バシェ』と他の史書に見える記述との比較，及び同書が他のチベット人歴史家たちに与えた影響等については，全ての訳註作業を終えた後で筆者の知見を明らかにすることにしたい。

凡　例

一　チベット語のローマナイズは拡張ワイリー方式に基づき，〔　〕内に示した。

一　訳文における節題，改行，「」，　‘　’，“　”等の括弧は，すべて訳者による補足・強調である。

一　【　】内に記した略号・数字は，『バシェ』の*Bzh A*と*Bzh B*の頁番号を意味する。（例：【*Bzh A*.5】→以下は*Bzh A*の5ページの訳註である）。

一　参照文献の略号については本稿の末尾にアルファベット順に並べた。

一　訳文は極力原文に忠実な翻訳を心がけたが，日本語として読みやすいように［　］によって訳文を補った。こうした訳文の補足には，当該の文章に対する筆者の解釈が反映されていると理解されたい。

一　『バシェ』に登場するチベット人の生没年については『雪域历代名人辞典』（ko zhul grags pa 'byung gnas, rgyal ba blo bzang mkhas grub, *gangs can mkhas grub rim byon ming mdzod*, kan su'u mi rigs dpe skrun khang, 1992）に記されるものを参考までに附した。

2.『バシェ』訳註 ［*Bzh A*:1.1-15.3, *Bzh B*:1.1-16.14］

2.1 書 名

贊普ティソン・デツェンと戒師［ボディサッタと］阿闍梨パドマの時代，頸・密がそれぞれに為されたという，足の付いたバシェ[4]。

2.2 帰依偈と緒言 ［*Bzh A*:1.1-2, *Bzh B*:1.1-3］

三部主尊［文殊，金剛手，観世音］の変化［身］によって赭面の畢舎遮[5]を教化なさった方［々である］，父祖三王[6]に礼拝し，［彼らが］遺した言葉を［以下に］詳しく記す。

2.3 ソンツェン・ガムポ王の遺言 ［*Bzh A*:1.2-1.15, *Bzh B*:1.3-2.11］

贊普ティデ・ツクツェン[7]は，ガル大臣[8]が銅板に書いてチムプの蔵[9]に埋めた父祖ソンツ

---

4) 〔btsan po khri srong lde btsan dang mkhan po slob dpon pad+ma'i dus mdo sngags so sor mdzad pa'i sba bzhed zhabs btags ma bzhugs so〕［*Bzh A*］，〔btsan po khri srong lde btsan dang/ mkhan po bo dshi sa twa/ slob dpon pad+ma'i dus mdo sngags so sor mdzad pa'i sba bzhed zhabs btags ma bzhugs so〕［*Bzh B*］。

5) 〔sha za gdong dmar〕［*Bzh A*:1.1, *Bzh B*:1.1-2］。逐語訳では「肉を食す赤い顔［の者］」の意。チベットの仏教徒史家たちは仏教伝来以前のチベットの未開性・野蛮性をこのように表現することがある。尚『唐書』には，古代チベット王国（吐蕃王国）の事実上の初代王であるソンツェン・ガムポの妃・文成公主がこの風習を嫌ったため，王がこの風習を禁止したと記されており（佐藤長『古代チベット史研究』東洋史研究会，1959年，791頁参照），後述するように『バシェ』にも中国皇帝がチベットを「赭面の国」〔gdong dmar gyi yul〕［*Bzh A*:6.10, *Bzh B*:7.8］と表現する一文が見える。尚，〔sha za〕とは，インド神話に現れる人の血肉を喰らうとされる鬼神（喰屍鬼）の一種であるピシャーチャ（Piśāca）のチベット語訳でもあり，畢舎遮や毘舎遮とも漢訳される。

6) 〔mes dbon gsum〕［*Bzh A*:1.1-2, *Bzh B*:1.2］。仏教弘通に貢献したとされる古代チベット王国の3人の王，即ち，ソンツェン・ガムポ〔srong btsan sgam po〕，ティソン・デ(ゥ)ツェン〔khri srong lde (or, lde'u) btsan〕，ティツク・デツェン（レルパチェン）〔khri gtsug lde btsan, ral pa can〕を指す。

7) 〔btsan po khri lde gtsug btsan〕［*Bzh A*:1.2, *Bzh B*:1.4］。ティデ・ツクテン〔khri lde gtsug brtan〕，或いはメー・アクツォム〔mes ag tshom〕とも呼ばれる。ティソン・デツェンの父であり，ヤルルン王家第37代王。［*MDz*:180］によれば，戊戌の年（698年）にドゥーソン・マンポジェ・ルンナムトゥル王〔'dus srong mang po rje rlung nam 'phrul〕と母チムサーツェンモ・トクゲ〔mchims bza' btsan mo rtog ge〕の子息として生まれ，乙未の年（755年）にベー・ドンツァプ〔'bal ldong tsab〕等によって殺害されたとされる。尚，『紅史』は，ティデ・ツクツェンは鉄・男・蛇〔lcags pho 'brug〕の年に生まれ，63歳で逝去したとしている［*DM*:36.16-18］。

8) 〔blon po 'gar〕［*Bzh A*:1.3, *Bzh B*:1.5］。ガル・トンツェン・ユルスンツェン〔mgar stong btsan yul zung btsan, ?-667〕を指すと思われる。ソンツェン・ガムポ時代の宰相であり，ソンツェン・ガムポ王の死後もグンリ・グンツェン〔gung ri gung btsan, 638-655〕，マンソン・マンツェン〔mang srong mang btsan, 653-679〕王治世下で権力をふるったとされる。

ェン［・ガムポ］[10]の遺言文書を見たところ，「私の孫の時代に‘デ’〔lde〕という王［が現れる。その王］の時代，［チベットに］正しき神法〔dag pa'i lha chos〕が生じる。如来に随って出家する者は頭を剃髪し，足は裸足，身体には緋色の勝幢[11]をお召しになる。［そうした］神と人の帰依処も多く生じる［であろう］。それによって自他の今生と来世の善趣と解脱という一切の平安が生じるのであるから[12]，私の子孫［である後世の］王〔rje〕と大臣たちは［彼らの］生活を保証し，支配から自由にして[13]，［彼らを人々に］平安を施す尊い帰依処として敬いなさい。」と書いてあるのをご覧になり，‘デ’というのは自分［のこと］であるとお考えになった。

その後，［ティデ・ツクツェン王は］デンカ・ムレコシャ[14]とニャク・ジュニャーナ・クマル[15]の二人を［仏］法を求めてインドに送ったところ，［彼らは］「パンディタ・サンギェー・サンワ〔paN+Di ta sangs rgyas gsang ba〕と，サンゲー・シワ〔sangs rgyas zhi ba〕の二人が，カンティセ［=カイラス山］で修行をおこなっている」と［いう情報を］聞き，それら二人を［チベットに］招聘［しようと］したが，［彼らはチベットには］やってこなかった。［だが，デンカ・ムレコシャとニャク・ジュニャーナ・クマルは，］それら二者の御心で，『分別善悪報応経』〔mdo sde las rnam par 'byed pa〕と『金光明経』〔gser 'od dam pa〕という二つの経を［受け取って，チベットに］招来し，［それらを］王の帰依処として呈上した[16]。［そして，それらの経典の］御住居〔bzhugs khang〕の如きもの［=それらの経典を安置する建物］として，五つの仏堂〔lha khang〕を建てた。［即ち］ラサ・カルダク〔lha sa mkhar brag〕，ダクマル・ディンサン〔brag dmar 'gran bzang〕，チムプ・ネレー〔mchims phu ne ral〕，ダクマル・カチュ〔brag dmar ka chu〕，【*Bzh B*:2】

---

9) 〔mching phu'i phyag mdzod〕［*Bzh A*:1.3, *Bzh B*:1.5］。［*KhG*:293.23］では〔mchims phu'i dkor mdzod〕，［*DNg*:66.2］では「チムプの岩穴」〔mchims phu'i rdza gseb〕とする。〔mching phu〕は〔mchims phu〕の誤記ないし異体であり，サムイェの北方に広がるチンプ渓谷〔bsam yas mchims phu〕を指すと思われる（Keith Dowman, *The power-places of Central Tibet: the pilgrim's guide*, Timeless Books, 1988, pp.226-228）。

10) 〔mes srong btsan〕［*Bzh A*:1.3, *Bzh B*:1.4］。ヤルルン王家第33代王ソンツェン・ガムポ〔srong btsan sgam po, 617-650〕を指すと思われる。古代チベット（吐蕃）王朝の事実上の建国者であり，ネパールからタクリ王国のアンシュ・ヴァルマン王の娘ブリクティー・デーヴィーを妃に迎え，また息子グンソン・グンツェンが逝去したあと63歳で重祚し，唐から輿入れした息子の未亡人・文成公主を自分の妃にしたとされる。

11) 〔rgyal mtshan〕［*Bzh A*:1.5-6, *Bzh B*: 1.9］。［*KhG*:294.4］は「衣服」〔na bza'〕とする。

12) 〔de la rang dang gzhan gyi 'di dang phyi ma mtho ris dang thar pa thams cad kyi bde ba 'byung bas〕［*Bzh A*:1.6-7, *Bzh B*:1.10-11］。［*KhG*:294.4-6］の記述に基づき〔de las rang dang gzhan gyi tshe 'di dang phyi ma'i mtho ris dang thar ba'i bde ba thams cad 'byung bas〕の誤記と解した。

13) 〔chab 'og nas bde byin la dbu'i mchod gnas su khur cig〕［*Bzh A*:1.7-8, *Bzh B*:1.12-13］。［*KhG*:294.6-7］の記述に基づき〔chab 'og nas phyung la bde ba byin dbu'i mchod gnas su khur zhig〕の誤記と解した。

14) 〔bran ka mu le ko sha〕［*Bzh A*:1.9, *Bzh B*:1.14］。［*KhG*:294.8］は〔bran ka mu le ka Sha〕とする。

15) 〔gnyags dz+nyA na ku ma ra〕［*Bzh A*:1.9, *KhG*:294.9］，〔gnyags dz+nyA na ku mar〕［*Bzh B*:1.14-15］。［*PCh*:183.23］は〔gnyags dz+nyA na ku mA ra〕とする。

16) ［*KhG*:294.12］には，これら二つの経典の他に「…クリヤ〔kri ya〕とウパ〔u pa〕［の教説を］を幾らか賜り，経巻を招来して王の帰依処として呈上した」とある。また［*PCh*:183.23-24］は，これら二つの経典はデンカ・ムレコシャとニャク・ジュニャーナ・クマルによって翻訳されたとしている。

サムイェ・マサゴン〔bsam yas ma sa gong〕という5つの経堂[17]を建てた［のである］。

すると歌舞を好む叔父たちは皆，［ティデ・ツクツェンの行為を］好まず，「私［たち］のこの贊普は，信仰深く，［仏］法を好み，容貌が良くないので，婆羅門〔bram ze〕ではなかろうか」と話し合った。そのことが王〔rje〕の耳に入り，「私が婆羅門【*Bzh A*:2】ならば，私の妻［である］この南詔[18]の妃に［生まれる］子が，私よりも信仰深く，良い容貌でありますように。私が間違いのない［=正しい］贊普であるならば，［我が］子が尚論[19]たちに打ち負かされてしまうことがありませんように」という呪詛〔dmod〕を唱えた。［その後，南詔出身の］妃に，神の男児のような，鼻梁が高く，額が広い，甚だ美麗な子息が生まれたので，尚論たちは「チベットのこの贊普は，最清浄の王である」と言った。［そして］この者は人ではなく神の子

---

17) ティデ・ツクツェン王が経典を安置するために建設したとされる経堂については［*KhG*:294.14-15］，［*PCh*:183.20-22］等にも記述が見られるが，その名称については多少の相違いがある。即ち，(1)〔lha sa mkhar brag〕，(2)〔brag dmar 'gran bzang〕(*Bzh B*〔brag dmar mgrin bzang〕)，(3)〔mtshims phu ne ral〕(*Bzh B*〔mchims phu ne ral〕，*KhG*〔mchims phu nam ral〕，*PCh*〔mchims phu gnam sral〕)，(4)〔brag dmar ka chu〕(*KhG*〔brag dmar ka ru〕，*PCh*〔brag dmar du ska chu shar sgo〕)，(5)〔bsam yas ma sa gong〕(*KhG*〔ma sa gong〕)。*PCh*ではこの他に〔dar 'phur mkhar lhag〕，〔mdo smad du ling chu khri rtse〕，〔'phang thang ka me〕，〔ka chu ban chung〕を加える。尚，［*KhDC*:300.12-13］では，〔'ching bu〕，〔ka chu〕，〔brag dmar mgrin bzang〕，〔'khar phug〕，〔khri rtse〕，［*ML:*197.2-3］では，〔brag dmar ka ru〕，〔kha che 'brin bzangs〕，〔lha sa kha brag〕，〔'phyin phu nam ral〕，〔mang gong〕の5つとする。

18) 〔ljang〕［*Bzh A*:2.1, 5, *Bzh B*:2.4］，或いは〔'jang〕［*Bzh B*:2.11］。8世紀半ば中国西南部，雲南地方の洱海地区に勃興したチベット・ビルマ語族の王国。唐の高宗の永徽（650-655）年間に唐に入朝した細奴羅（在位653-674年）を初代王とし，以後，第13代王・舜化貞（在位897-902年）まで250年あまりに渡って続き，最盛期には四川や東南アジアにまでその勢力を拡大した。古代チベット王国は750-794年までの間，南詔を支配下に置いていたとされる。

19) 〔zhang blon〕［*Bzh A*:2.2, *Bzh B*:2.6］。古代チベット王国に於ける外戚系大臣をいう。シャン(ポ)〔zhang (po)〕とは「母方のおじ」の意であり，『賢者喜宴』［*KhG*:169.16-18］に依れば，ヤルルン第28代王ラ・トトリ・ニェンツェン〔lha tho tho ri gnyan btsan〕とその妃ノサ・マンガル〔rno za mang dgar〕の子，ティ・ニェンスンツェン〔khri gnyan gzungs btsan〕が，自分の母親の兄弟をシャン〔zhang〕と呼び習わしたことから，以後，王子の母の兄弟を指すようになったとされる。7世紀から9世紀のチベットでは，王妃の親族が王子の即位後に政権の内部に入り込んで権力を行使するという政治的慣習が存在した。彼らは王子の母方の叔父の大臣，即ち尚論（シャンロン）と呼ばれた。

［*KhG*:185.6, *KhDC*:254.3］には，古代チベット王国において権力を行使した大臣として「3つのシャンとロン」〔zhang gsum blon〕という表現が見えるが，このうち「3つのシャン」〔zhang gsum〕とは，‘ブロ（或いはド）’〔'bro〕氏，‘チム’〔mchims〕氏，‘ナナム’〔sna nam〕氏という三氏族出身の尚論たちを指し，「ルン」〔blon〕とは‘バー’〔dba'〕氏出身の大臣を指す。ティソン・デツェン王政下でもこれらの氏族は強大な権力を有し，大臣の長にあたる宰相〔blon chen〕の多くがこれらの氏族から輩出されたとされる。王子の将来に対するティデ・ツクツェンの懸念を表明したこの一文は，当時の王室における尚論たちの影響力の強さを表現したものと思われる。（dung dkar blo bzang 'phrin las, *dung dkar tshig mdzod chen mo*, krung go'i bod rig pa dpe skrun khang 〈東嘎洛桑赤列『東嘎藏学大辞典』中国藏学出版社〉, 2002, pp.1761-1762参照）

弟〔lha'i dpon〕であるから［という理由で，その］子息に，名前もジャンツァ・ラプン[20]とお付けした。

2.4　金城公主の輿入　［*Bzh A*:1.15-3.8, *Bzh B*:2.11-3.8］

［やがて時が経ち,］その者［=ジャンツァ・ラプン］に妻を迎える時期になったとき，チベット［人］は皆，猿の子であるから，この者の妃として相応しくない，この者には中国〔rgya〕[21]の娘を［妃として］とる［べきである，という］ことが決まった。

チベットの王において良好なる者は，父祖ソンツェン［・ガムポ］であり，［彼は］アーリヤ・パロ〔ar+ya pa lo〕の化身として知られる。その［=ソンツェン・ガムポの］親戚〔gnyen zla〕は中国皇帝〔rgya rje〕コンツェ・トゥルチュン〔kong rtse 'phrul chung〕であり，その者もまたアーリヤ・パロの化身として知られる。［コンツェ・トゥルチュンの］息女がコンチョ[22]である。その者［=コンチョ］は［中国の］伝統の［五行に基づいて吉兆を占うための］360 の占いの表〔gab rtse sum brgya drug cu〕を持ってい［た。そし］て，中国の至高の王として知られるその者［=コンツェ・トゥルチュン］の子息は中国皇帝ドムシン〔rgya rje 'brom shing〕［であり，さらに］その子息は中国皇帝テワ〔rgya rje the ba〕［であり，さらに］その子息は中国皇帝ハーンペンセル〔rgya rje hAn phan zer〕[23]［であり，さらに］その子息は中国皇帝チャンサン〔rgya rje cang bzang〕［であり，さらに］その子息が，中国皇帝リティ・シェルラン・ミクセル〔li khri bzher lang mig ser〕[24]という者［である］。現在［中国皇帝として］御座すその者の息女は，金城公主[25]という者［であり，その者］を［ジャンツァ・ラプンの妻としてめ］とるのが理に適っていると決めた[26]［。その］後，ニャク・ティサン[27]［と］30 名の大臣の供回りが使節とし

---

[20] 〔'jang tsha lha dbon〕［*Bzh A*:2.5］，〔'jang tsha lha dbon〕［*Bzh B*:2.11］。「南詔の孫［にして］神の甥（或いは息子）」の意。

[21] 〔rgya〕［*Bzh A*:2.6, *Bzh B*:2.13］。〔rgya〕は中国〔rgyal nag〕とインド〔rgya gar〕の何れの省略形としても用いられるが，『バシェ』では〔rgya〕が単独で現れる場合は中国（唐）を指し，インドを指す場合は〔rgya gar〕と記されることが多い。

[22] 〔kong co〕［*Bzh A*:2.8, *Bzh B*:2.21］。「公主」の音写であり，ここではソンツェン・ガムポの妃の一人であった文成公主を指すと思われる。

[23] 〔rgya hAn phan zer〕［*Bzh A*:2.10］，〔rgya rje hAn phan zer〕［*Bzh B*:2.18］。後者を採った。

[24] ［*KhG*:295.5-6］では〔li khri bzher mang ma〕。

[25] 〔gyim shang ong jo〕［*Bzh A*:2.11, *Bzh B*:2.20］。雍王守禮の息女で，後に唐朝第4代皇帝・中宗（656-710. r. 683-684, 705-710）の養女になったと伝えられる金城公主（?-739）を指す。［*DM*:21.4-6, 36.19］でも，金城公主は唐・中宗〔dzu dzung〕の弟である雍王〔wi dbang〕の娘であったとしている。尚，金城公主の音写の仕方については，〔gyim shang 'ong co〕［*Bzh C*:4a］，〔gyim shang kong jo〕［*PCh*:183.25］等，史料によって相違が見られる。

[26] ［*KhG*:295.5］では，ジャンツァ・ラプンの妻を中国から娶ったのは,「父祖ソンツェン・ガンポの流儀をなすべきである［=流儀に倣うべきである］」とされたためであるとしている。

[27] 〔gnyags khri bzang〕［*Bzh A*:2.12, *Bzh B*:2.21］。［*KhG*:295.7, 14］では〔gnyags khri bzang yang ston〕とし，こ

て派遣された。そして［中国に到着し,］使者が中国皇帝〔rgya rje〕に【*Bzh B*:3】小箱[28]を呈上すると［中国皇帝は自分の］娘を［チベットの使者に］与えた［。その］後,［金城］公主は幻術の［不思議な］鏡[29]を持っていたの［であるが，彼女がそれ］を見たところ，山谷の良好なチベット地方と，その［=チベットの］良い容貌の王が［鏡の中に］見えた［ので，彼女はチベットへの輿入れを決意し，その］後,［チベットにやって］来た[30]。

チベットの王子［=ジャンツァ・ラプン］が逝去して[31],［ジャンツァ・ラプンを葬るための］子供［用］の墓[32]が建てられた頃に,［金城］公主がパンタン[33]に到着したところ,［そこには,］「［私がチベットの］王である」と言う，顎髭を生やした一人の老人［=ティデ・ツクツェン］[34]しか居なかったので,［金城公主は,］姿の見間違いか,［それとも］鏡の見間違いか【*Bzh A*:3】と思い，悲しくなった。

の人物が後にジャンツァ・ラプンを暗殺した可能性を指摘している（後掲註31参照）。

28) 〔sgrom bu〕［*Bzh A*:2.13, *Bzh B*:3.1］。特に王の詔書を入れる小箱を指す。

29) 〔'phrul gyi me long〕［*Bzh A*:2.13, *Bzh B*:3.1］。［*KhG*:295.9］では「三界［の全て］が見える幻術の鏡」〔'phrul gyi me long srid gsum mthong ba〕,［*KhDC*:300.5］では「白銀の鏡」〔dngul dkar me long〕とする。

30) 金城公主がチベットに到る経緯については,［*ML*:198.7-199.1］に次のような記述もある。「その後,［金城］公主と家来たちは中国とチベットの境界に到ると，公主は突然，心臓を矢で射られたような苦痛に襲われた。すぐに鏡を拭いて［鏡の中を］見ると，以前の美麗な王子の姿は見えず，顔が毛で覆われた醜い容貌の老人が居たので，甚だ落胆した。［…中略…］その後，チベットの王が派遣した使者が［到着し］中国の女［=金城公主］と家来たちに“汝の夫に相応しい神にも似た我が子は禍によって死んだ。もう汝は祖国に戻るか，［それとも］私を見た後で［チベットに］来るか［どうか決めるか］”と書かれた手紙を渡した。すると中国の女は“もう一度決めたことであり，どんな苦楽が生じようともチベットに行く”と言った」。ツグラー・テンワもまた,「別の王統記」〔rgyal rab gzhan〕の記述に依るとして，これとほぼ同一の逸話を引いている（［*KhG*:296.1-6］）。

31) ［*KhDC*:300.10-11］及び［*DM*S:23a.6］も，金城公主はジャンツァ・ラプンの死後に入蔵したと伝える。尚，チベットの歴史家の多くはジャンツァ・ラプンの死因を暗殺によるものであったとしており，例えば『紅史』では「ジャンツァ・ラプンは大臣によって殺された」［*DM*:36.20］，『プトゥン仏教史』の編者ドルジェ・ギェルポも「ジャンツァ・ラプンは大臣によって殺害されたと言われる」［*PCh*:183.25-184.1］としている。またツグラ・テンワは，ジャンツァ・ラプンの死因について（1）夜間に馬にのってパンタンを散歩していたところ密教行者が放った矢が命中して死んだ，（2）自分の娘を娶らなかったことに怒ったニャク・ティサン・ヤントン〔gnyags khri bzang yang ston〕が王子を殺害した，（3）乗馬中に馬から落ちてして死んだ，という3つの説を紹介している（［*KhG*:295.11-15］）。

32) 〔bang so skye bu〕［*Bzh A*:2.15］,〔bang so skye 'u〕［*Bzh B*:3.4］。「子供（用）の墓」の意に解した。

33) 〔'phang thang〕［*Bzh A*:2.15, *Bzh B*:3.4］。今日の中国チベット自治区・乃東県・頗章郷付近に比定される。尚，『賢者喜宴』は，ティデ・ツクツェンはこの地にパンタン宮殿〔pho brang 'phang thang〕を建て［*KhG*:293.20-21］，この宮殿に金城公主を招いた［*KhG*:296.7-8］としている。

34) 〔rgan po ag tshoms can〕［*Bzh A*:2.16, *Bzh B*:3.5］。この逸話により「顎髭を生やした老人（メー・アクツォム）」はティデ・ツクテンの異名となった。［*KhDC*:300.7-8］にも，ティデ・ツクツェンをメー・アクツォムと綽名したのは金城公主自身であったと記されている。

その後，［ギムシャン・オンジョは，］日ごと銀のタムプラ[35]の伴奏で哀歌〔sdug glu〕を謡い，夜ごと笛の伴奏で「インドには正法があり[36]，ネパールは温暖である。そう思って［私はチベットに嫁ぐ］決心をした。インドには占い[37]の道具があるが，［それは私の］祖国からは遠く離れている。そう思って［私はチベットに嫁ぐ］決心をした。チベットの中央には高貴な王族がいるが，［その］大臣は凶悪である。チベットの大臣は甚だ罪深い。」という［内容の］歌を謡った。そのことを大臣が王〔rje〕に御報告したところ，王［=ティデ・ツクツェン］の御口から「もう彼女に贈物を与え，祖国まで送り届けよ。」と［いう言葉が］出た。［大臣が金城公主に］そのように申し上げると，［金城］公主は「［容貌が］良い王子が居たというなら，［その者は］私とは業が一致しなかったのであるから，いまさら堂々と祖国に去ることもできない[38]。もう［私は］メー［・アクツォム］と結婚する」と言った。

2.5 死者供養の儀礼 ［*Bzh A*:3.8-3.15, *Bzh B*:3.16-4.7］

その後［金城］公主は「私の叔母［である］コンチョ[39]の帰依処［であった］黄金の釈迦牟尼の御顔を見る」と言って，［ラサの］ギェータプ・ラモチェ［=小昭寺］[40]に［行ったが，そこに］は神［像］が御座りになっておらず，それを至る所でよく供養しつつ探したが見つからなかった［。その］後，ラサの仏堂[41]で供養を行っていたところ，［金城公主は］五つの浄堂（后殿）[42]の門を作った記録[43]があるのに，四つ浄堂の門しか無い［ことに気づいた。その］

---

35) 〔ltam bu ra〕［*Bzh A*:3.1, *Bzh B*:3.7］。〔tam bu ra〕の誤記ないし異体と思われる。リュートに似た撥弦楽器の一種を指す。

36) 〔dam pa'i chos gdog〕［*Bzh A*:3.2］，〔dam pa'i chos bdog〕［*Bzh B*:3.9］。後者を採った。

37) 〔ju zhag〕［*Bzh A*:3.3, *Bzh B*:3.10］。「ジュの（縄）索」の意であり，中国の占い師やポン教徒たちが独自の計算，及び数珠・糸・小石などを用いて行ったとされる占いを指すと思われる（dung dkar blo bzang 'phrin las, *dung dkar tshig mdzod chen mo, op.cit,* p.874）。尚，後述するように『バシェ』［*Bzh A*:5.11-12］には，ティデ・ツクツェンが経典を手に入れるために中国に使者を派遣した際，中国皇帝・玄宗の御前にいたブムサンワンポ〔bum sangs dbang po〕という人物の側に「ジュの縄に通じた者」〔ju thig mkhas pa〕と呼ばれる者が居たと記されている（後掲註86参照）。

38) 〔pha yul du mchi bar mi spobs shig〕［*Bzh A*:3.7］，〔pha yul du mchi bar mi spobs shing〕［*Bzh B*:3.16］。後者を採った。『賢者喜宴』［*KhG*:296.13］では「祖国に去る気にならない（望まない）」〔pha yul du mchi bar mi spro〕とする。

39) 〔ne ne mo kong co〕［*Bzh A*:3.8, *Bzh B*:3.17］。〔ne ne mo〕は「おば」，或いは高貴な女性に対する敬称である。［*Bzh C*: 3a, 4a, 8b］では〔mum shang 'ong co〕。ソンツェン・ガムポ王の子息グンソン・グンツェンのもとに嫁ぎ，夫の死後，ソンツェン・ガムポの妃となった文成公主（Wen Cheng Gong Zhu）を指す。小昭寺〔rgyas btab r(w)a mo che〕は文成公主がグンソン・グンツェの菩提を弔うために建立したとされる。

40) 〔rgyal stag ra mo che〕［*Bzh A*:3.9, *Bzh B*:3.18］。〔rgyas btab r(w)a mo che〕の異体ないし誤記と解した。

41) 〔ra sa'i lha khang〕［*Bzh A*:3.10, *Bzh B*:3.19-20］。［*ML:*199.3-4, *KhG*:296.16］では「トゥルナン（大昭寺）」〔'phrul snang〕とする。

42) 〔tsang khang〕［*Bzh A*:3.10］，〔gtsang khang〕［*Bzh B*:3.20］。後者を採った。

43) 〔phud rabs〕［*Bzh A*:3.10, *Bzh B*:3.20］，守護尊を供養する儀礼である〔phud rab(s) rgyas pa〕との関連が推測

後，ここには［もう］一つ浄堂が隠されて【*Bzh B*:4】いるはずだと［思い,］建て増し部分の上面を[44]叩いたところ裂け目が生じ，それを掘ると門が開いて[45]，秘匿されていた釈迦牟尼の黄金の神［像］が見えた[46]［。その］後，［金城公主は，その］叔母の神［像］に「御顔をお見せ下さい」と請い申し上げ，［その像を］供養した。［そして金城公主は］「［チベットでは,］死んだ大臣には食物の分け前〔zan skal〕が無いが，我が中国［には，仏］法が広ま［ってい］るから，死んだ人には七期[47]がある。［だが,］チベットには［仏］法が広まっていないから［，大臣たちは死んだら食べ物の分け前を貰うことができない。チベットの］大臣は哀れだ」と言って，人が死んだらすぐ，1,000 ほどの神・人にそれぞれ食物［を与えて］宴を行うよう求めた。それがチベットのツェ[48]と言われるもの［の始まり］である。

2.6 ティソン・デツェンの誕生 ［*Bzh A*:3.15-4.4, *Bzh B*:4.7-14］

その後，卯年〔yos bu'i lo〕に［金城］公主に王子［=ティソン・デツェン］が生まれた[49]。

されるが，仔細不明。この浄堂が建設された際に5つの門を作ったことを示す何らかの記録を指すと推測した。［*KhG*:296.17］では〔bcos rabs〕としているが，これが〔bcos rab〕の誤記であれば，何かを改修した記録を意味する。

44) 〔glo 'bur gyi ya lad kyi log tu〕［*Bzh A*:3.11］，〔glo 'bur gyi ya lad kyi 'og tu〕［*Bzh B*:4.1］。〔glo 'bur gyi ya klad kyi logs su〕の誤記と解した。

45) 〔skos nas sgo phye〕［*Bzh A*:3.12］，〔rkos nas sgo phye〕［*Bzh B*:4.2］。後者を採った。

46) ［*ML:*199.4-5］では「釈尊像は鏡のついた南門にお座りになっていることを知り，門を開けて釈尊像をそこから取り出し…」とする。

47) 〔bdun tshig〕［*Bzh A*:3.14］，〔bdun tshigs〕［*Bzh B*:4.5］。後者を採った。死後七日毎に行われる追善供養を指す。

48) 〔tshe〕［*Bzh A*:3.15, *Bzh B*:4.7, *Bzh C*:4a］。［*KhG*:297.1］でも，金城公主の提案によりチベットでツェと呼ばれる「故人への供養（追善供養）の習慣を創始された」〔gshin dge'i srol btsugs〕としている。しかし後述するようにこの習慣は，マシャン・ドムパキェをはじめとする廃仏派の大臣たちが制定したティム・ブチュン〔khrims bu chung〕と呼ばれる法によって禁止されたといわれる。

49) ティソン・デツェン王の生誕年については史料によって相違が少なくない。例えば［*P.T.*1288.93, *PG*:51., *RTs:*223.17, *KhDC*:301.3］は午〔rta〕年（或いは壬午〔chu rta〕年。西暦742年），［*Bzh A*:3.16, *Bzh B*:4.8-9, *KhG*:297.11］は卯年，［*DM*:36, *ML:*199.11-12, *PJ*:6.3-4］では庚午〔lcags pho rta〕年（730年），［*KhDC*:301.3, *PCh*:184.2, *DM*S:24.1-2, *NPh*:29.17］では戊午〔sa pho rta〕年（718年）としている。また［*PG*:51.21］では王子の誕生時の名はナツォク〔sna tshogs〕であったとしており，［*DM*S:24.2-3］ではティソン・デツェンが誕生したとき,「ソンツェン・ガムポが逝去してから80年が経過していた」としている。

尚，グラー・テンワは『賢者喜宴』の中でティソン・デツェンの生誕年に関する次のような短い考察を行っている。「…『バシェ』に依れば，［ティソン・デツェンは］卯年に生まれ，その後8歳で王位についたと説明しているが，［ティソン・デツェンの］父上が庚辰［の年，即ち西暦740年］に誕生して63歳で逝去した時［802年］，子息［=ティソン・デツェン］は丁卯［787年］に誕生したならば16歳［になっており］，己卯［799年］に誕生したならば［まだ］4歳にしかなっていない。［『バシェ』に記されるように，ティソン・デツェンの即位が］8歳［の時］であったということが正しければ，［ティソン・デツェンは］乙亥［の年，即

その時，王はダクマル・オムブツェル宮殿〔pho brang brag dmar 'om bu tshal〕[50]に【*Bzh A*:4】滞在なさっていた。卯年の春の第一月の13日[51]になったとき，王の和尚[52]が「王よ，汝の妃に菩薩であることが確実な子息が生まれる筈である。その者［のため］にリムド[53]をなされよ」と言った。［そこで王は］真夜中に108の供養塔（仏塔）〔mchod rten〕をお建てになり，［さらに］「余った泥で我が子[54]の身代わり〔sku tshab〕を作れ」と言って，馬欄草で作った縄[55]の付いた供養塔も築いた[56]。翌朝，使者がやってきて，「［金城］公主に子息が生まれた」と言った。

ち795年］に誕生しているはずであるから，文書［の記述］が誤っているように思える。多くの文献では［ティソン・デツェンは］庚午［の年，即ち790年］に誕生して13歳で王位に就いたとしているので，これが正しいように思える。プトゥンは戊午［の年，即ち718年］に誕生したとしているが，13歳に［即位したとすれば，これ］は早いと思われる。」［*KhG*:297.2-9］。但しツグラー・テンワは，メー・アクツォムの歿年とティソン・デツェンの即位年を自明のものとしているため，その意見を容易に受け入れることはできない。尚，ダライラマ5世は［*PG*:52.23-53.12］で，ツグラー・テンワの以上の考察に対する反論を行っている。

50) 既に見たようにティデ・ツクツェンが建設したとされる仏堂で，現在の中国チベット自治区ラサ市の南東，扎囊县桑耶区に位置したとされる。トゥンカル・ロサンティンレーは，ダクマル・オムブツェルはティソン・デツェンが誕生した「宮殿」〔pho brang〕であり，その後，仏堂になったとしている（dung dkar blo bzang 'phrin las, *dung dkar tshig mdzod chen mo*, krung go'i bod rig pa dpe skrun khang 〈東嘎洛桑赤列『東嘎藏学大辞典』中国藏学出版社〉, 2002, p.1498）が，『バシェ』ではティソン・デツェンが誕生した地を明記せず，ティデ・ツクツェン王はただ我が子に会うためにパンタンに到ったとしている。また［*P.T.*1288.93］では，ティソン・デツェンは「ダクマルで生まれた」としているが，これがダクマル・オムブツェルを指すかは定かでない。尚，後述するようにダクマル・ディンサンは廃仏派の大臣マシャン・ドムパキェによって一時破壊されるが，その後，サムイェ寺の建設が開始された際に崇仏派の大臣サンシによって修復されたとも伝えられる。

51) 〔yos bu lo dpyid zla ra ba'i tshes bcu gsum〕［*Bzh A*:4.1, *Bzh B*:4.9］。〔dpyid zla ra ba〕は孟春・蔵暦正月であり四季孟仲季二月にあたる。尚［*KhG*:297.11］では同年同月の3日〔tshes gsum〕とする。

52) 〔rgyal po'i hA shang〕［*Bzh A*:4.1, *Bzh B*:4.9］。ティデ・ツクツェン側近の中国僧を指していると思われる。［*KhG*:297.12］では「予知力を持つ和尚」〔hwa shang mngon shes can〕とする。尚〔hA shang〕及び〔ha shang〕は「和尚」(he shang) の音写であり，「和尚〔hwa shang〕とは中国の法を説く阿闍梨〔rgya'i chos stong pa'i slob dpon〕であり…」［*PG*:54.17-18］とあるように中国出身の仏教僧を指す。

53) 〔rim gro〕［*Bzh A*:4.2, *Bzh B*:4.11］。災いを払う浄化の儀式，或いは安寧祈願の儀式を指す。

54) 〔ngam bu〕［*Bzh A*:4.3, *Bzh B*:4.12］。〔nga'i bu〕の誤記と判断した。［*KhG*:297.14］では「私」〔nga〕とするが，これから誕生する子息のために自分の「身代わり」を作るというのは奇異である。

55) 〔bre thag〕［*Bzh A*:4.4, *Bzh B*:4.13］。［*KhG*:297.15］の記述に基づき〔dres thag〕の誤記と解した。馬蘭草〔dres ma〕で編んだ縄・綱〔thag〕を指すと思われる。尚，ツェワン・ツァロンは〔dres ma〕をアヤメ科の高山植物であるイリス・ケマオネンシス（Iris kemaonensis）に同定している（Tsewang J. Tsarong, *Tibetan Medicinal Plants*, Tibetan Medical Publications, Kalimpong, India, 1994）。

56) 〔gtsigs〕［*Bzh A*:4.4］〔brtsigs〕［*Bzh B*:4.13］。後者を採った。尚［*KhG*:298.4-6］に依れば，縄の付いた供養塔を作るのは，泥で作った像を綱で縛ることによって長く伸ばし，子息の長寿のしるしとするためである。

2.7 嬰児の略奪 ［*Bzh A*:4.4-10, *Bzh B*:4.14-5.2］

王はパンタン[57]に至ると，［金城］公主の子をナナムサー・シテン[58]が奪って，「この子は，私に生まれた［子供な］のである」と言った。全ての大臣が［（子供を）良く調べる（ことができる）ようにするために[59]］子を壁の穴に置き，誰にでも取れるようにしておいたところ，［金城］公主が先に抱いていたのをシテンが引っ張ったので［金城公主はその子を］放し，「［その子は］間違いなく私の［子］，汝は魔女だ」と言って［子を］渡した。［そこで大臣たちは，王子が］オンジョの子であることを知った。

［その後］一年が経過した時，王子が［初めて自分の］足で立つ［ことを祝う］宴[60]が行われた。ナナム氏の者[61]［たち］はそれぞれの手に小さな外套[62]を持って「母方の叔父[63]の膝[64]［の上］においで」と言った[65]。［すると］王子は「［私，］ティソン・デツェン[66]は漢族と蔵

---

57) 〔'phang thang〕［*Bzh A*:4.5, *Bzh B*:4.14］。［*KhG*:297.16］では〔yar lung 'phang thang〕とする。パンタン宮殿〔pho brang 'phang thang〕を指しているとも思える（前掲註33参照）。

58) 〔snam snang gza' bzhi stengs〕［*Bzh A*:4.5］，〔sna nam bza' bzhi'i stengs〕［*Bzh B*:4.15］。「ナナム氏出身の妃であるシテン」の意（ナナム氏については後掲註61参照）。『バシェ』の他，多くのチベットの歴史書がこの女性を金城公主からティソン・デツェンを奪った人物として記しているが，敦煌文書の『年代記』［*P.T.*1286.66-67］によれば，ティソン・デツェンの実母とされる（後掲註69参照）。尚，この女性の名については〔sna nam bza'〕［*PCh*:184.3］，〔chen ma sna nam bza', sna nam bza' zhi steng〕［*KhG*: 295.21, 297.17］，〔sna nam mo sbyi stengs〕［*KhDC*:301.4］，〔btsun mo sna nam gza〕［*DM*S:24.3］，〔rnam snang bza'〕［*PG*:51.22］等，資料によってそのスペル・呼称の相違が認められる。

59) ［*KhG*:297.18-19］の記述〔brtag pa bya ba'i phyir〕により訳文を補った。

60) 〔zhabs tshugs kyi dga' ston〕［*Bzh A*:4.8, *Bzh B*:4.19-20］。他の資料では〔zhabs 'dzugs (pa'i) dga' ston〕［*PG*:52.4-5, *KhG*:295.22, 297.2-23］とも記される。子が誕生した後，初めて自分の足で立つことを祝う宴を指す（dung dkar blo bzang ‘phrin las, *dung dkar tshig mdzod chen,* op.cit., p.1766）。

61) 〔sna nam pa〕［*Bzh A*:4.8, *Bzh B*:4.20］。古代チベット王国において外戚系大臣（尚論）を多く輩出したことで知られる氏族の一つ。ナナム氏がチベット王室で権力を有するようになった経緯は未だ明らかでない部分が多いが，ナナム〔sna nam〕とはチベット語で中央アジア，ウズベキスタンの古都・サマルカンド（Samarkand,or Samarqand）を意味し，この地は後にチベットへの密教導入に大きく貢献したとされるグル・パドマサンバヴァの25高弟のうち，ナナム・ドルジェ・ドゥジョム〔sna nam rdo rje bdud 'joms〕，ナナム・イェシェーデ〔sna nam ye shes sde〕の出身地でもあるともされることから，この地域とナナム氏の関連性が注目される。

62) 〔ber chung〕［*Bzh A*:4.9］，〔per chung〕［*Bzh B*:4.20］。前者を採った。

63) 〔zhang po〕［*Bzh A*:4.9, *Bzh B*:4.21］。前掲註19参照。

64) 〔spang〕［*Bzh A*:4.9, *Bzh B*:4.21］。［*KhG*:298.1］の記述に基づき〔pang〕の誤記と解した。

65) この宴については別の記述もある。例えば［*ML*:199.22-201.3］に依れば，我が子をシテンに奪われて絶望した金城公主はチベットの王統を絶やすために各地に赴いて様々な詛いをかけ，名誉挽回の機会を窺った。数年後，ティソン王の足が地に着くことを祝う式典が催されることになり，その場にシテンと金城公主の親戚が招かれた。ティデ王は上座に就き，王の右側にはシテンの親族が，左側には金城公主の親戚が座った。そしてティデ王は我が子に向かって次のように言った。「二人の母から生まれた一人の

族の混血児〔rgya tsha〕である[67]。【*Bzh B*:5】ナナム［氏］が何をする必要があろうか[68]。」と仰った後，中国〔rgya〕［側の人］の膝に赴き，名前も自ら付けたのである[69]。

子よ，体躯は小さいが［汝には］神変［の力］が具わっている。穀物酒（チャン）で満たされたこの金杯を，息子よ，そなたの母方の伯叔父の手に渡しなさい。いずれが母か，信頼できる方にそうしなさい」（［*ML*:200.14-48］）シテンの親族は美しい装飾品や花輪でティソン王を惹き付けようとしたが，金城公主は強力な呪詛の力で我が子を導いた。ティソン王は金城公主の母方の伯叔父の膝に座ると，「私，ティソン・デツェンは漢族と蔵族の混血児である。ナナム氏の叔父の仕事は［もはや］不用である」と叫んだ。こうしてティソン王が金城公主の子であることが公に認められた。金杯の授与をモチーフとしたこの種の逸話は，他に［*KhG*:298.16-299.13, *PG*:51.22-52.22, *DM*S:24a.1］等にも見える（但し［*PG*:52.8-10］では「二人の母から生まれた一人の子よ，体躯は小さいが［汝には］神変［の力］が具わっている。」という一文が省かれている）。

尚，［*ML*:201.10-11, *KhG*:298.17-18］ではこの宴の際，ティデ・ツクツェンを挟んで「ナナム氏たちは右に列を成し，中国の大臣たちは左に列をなした」としているが，この他にも幾つかの史書は，祝典や宗論などの際，対立関係にある二者が坐す席の位置を明記している。例えば仏教徒とポン教徒が宗義論争を行った際，仏教徒は王の右側，ポン教徒は左側に座った［*YTsh*:142.16-17］とされ，またサムイェの宗論では大乗和尚は右，カマラシーラは左に座った［*PCh*:188.14-15, *KhG*:385.15-20］とされる。なお今日ではチベットの仏教徒は右廻り，ポン教徒は左廻りで聖地・寺院を参拝することが知られるが，ソンツェン・ガムポ王の時代には，「右に廻るのはマハームードラ〔phyag rgya chen po〕，左に廻るのはゾクチェン〔rdzogs pa chen po〕，礼拝するのは大中観〔dbu ma chen po〕」［*YTsh*:129.14-16］という区別があったともされる。

66) 〔khri srong lde btsan〕［*Bzh A*:4.9, *Bzh B*:4.21］。『バシェ』本文ではここがティソン・デツェンという名の初出となる。ティソン・デツェンのスペルは，ティソン・デツェンとするもの（［*PCh*:184.3, *KhG*:295.23］等）とティソン・デゥツェンとするもの（［*PG*:51.21-22, *DCh*:125.13, 15］等）がある。尚，［*RTs*:223.17, *PG*l:51.21］では，ティソン王の誕生直後の名前はナツォク〔sna tshogs〕であったとされる。

敦煌出土『年代記』には国王に即位するまでのティソン・デツェンの名を‘ティ’を除いた‘ソン・デツェン’〔srong lde brtsan〕と記す記事（［*P.T.*1288.93-240］等）が見られるが，エリック・ハールの研究に依れば，古代チベット王国の王名にしばしば附される‘ティ’〔khri, or khrI〕は正統な王位継承者が登位した際に本来の名前の前に付される称号であり，クーデターによって王位が継承された場合には付されず，また正統な王位継承者であっても在位が短い場合や子息がいない場合は，この称号が用いられることはなかったとされる（Erik Haarh, *The Yar-lung Dynasty*, Kobenbavn, 1969, pp.66-88., Lin Guanqun, *A study on the Tubo Tsenpo Trisong Detsen*, Taiwan Commercial Press, Taipei, 1989, pp.71-78）。またナムケー・ノルブ〔nam mkha'i nor bu〕は，ティソン・デツェンという名はシャンシュン語とチベット語の合成語であり，その意味は「最上の智慧［を有する］賢明な神」〔lha mdzangs mkhyen rab〕であるとしている（nam mkha'i nor bu, *zhang bod kyi lo rgyus ti se'i 'od*, krung go'i bod kyi shes rig dpe skrun khang［南喀准布著『古代象雄梓吐蕃史』中国藏学出版社］, 1996，p.461）。

67) 〔rgya tsha legs〕［*Bzh A*:4.9, *Bzh B*: 4.21-5.1］。［*KhG*:298.1］の記述に基づき〔rgya tsha lags〕の誤記と解した。〔legs〕であれば「漢族と蔵族の善き（正しき）混血児［である］」となる。

68) 〔sna nam zhang gi ci bgyi 'tshal〕［*Bzh A*:4.10, *Bzh B*:5.1］。〔sna nam zhang gis ci bgyi 'tshal〕の誤記と解した。

69) このように『バシェ』をはじめとする多くの史書が金城公主をティソン・デツェンの実母として伝えているが，この伝説は敦煌文書や『唐書』に記される記録と幾つかの点で大きく異なっている。敦煌出

2.8 殺生の戒め ［*Bzh A*:4.11-5.10, *Bzh B*:5.2-6.4］

その後，4歳になった王子は，［ダクマル・］オムブツェル宮殿〔pho brang 'om bu tshal〕に滞在なさっていた。［その頃,］中国皇帝〔rgya rje〕は［チベット］王に大礼物を授ける［ための］使者［である］バー・デゥ〔'ba' de'u〕の子［である］ガルケン［という］中国の子供[70]を，王

土の『年代記』［*P.T.*1286.66-67］には「ティデ・ツクテンとナナム［氏出身］の妃マンモジェ・シテン〔sna nam za' mang mo rje bzhI steng〕と交媾し［て生まれ］た子息がティソン・デツェン［である］」と記されており，また［*P.T.*1288.90］には金城公主は739年，即ちティソン王が誕生する前に歿したと記されている（なお『旧唐書』では吐蕃の使者が唐に至って喪を告げた741年を金城公主の没年と記しており〈後晋・劉紡等撰『舊唐書』第一六册，中華書局，一九七五，五二三五頁［巻一百九十六上・列伝第一百四十六上・吐蕃上］。佐藤長訳注「吐蕃伝（旧唐書・新唐書）」『騎馬民族史（三）正史北狄伝』平凡社，1971，142-143頁〉，唐書を参考にして編まれたとされる『紅史』でも「金城公主〔kim shing kong jo〕は31年間チベットに滞在し，辛巳〔lcags mo sbrul〕［の年，即ち741年］に逝去した」［*DM*:21.12-13］とする。［*DM*S:24a.3］では「子息が生まれた5年後に母［=金城公主］は逝去した」とのみ記す）。また［*P.T.*1288.93］には，ティソン王が誕生した742年にマンモジェ（即ちシテン）が逝去したと記されている。

さらに［*P.T.*1288.61］及び『旧唐書』（『舊唐書』巻一百九十六上・列伝第一百四十六上・吐蕃上，第一六册，5228頁。佐藤長訳注，125頁）に依れば金城公主は710年にチベットに至ったとされるが，『唐書』には703年にティデ王は7歳であったと記されており，これに従えば金城公主の輿入れの時，ティデ・ツクツェンは‘髭をはやした老人’どころか未だ14歳の少年であり，婚姻可能な息子がいる筈もなかったことになる。恐らく金城公主は初めからティデ・ツクツェンに嫁するためにチベットに到ったのだろう。金城公主をティソンの実母と伝える伝説は，もしそれが単なる誤謬であったとすれば，後世の歴史家が金城公主をソンツェン・ガムポ王と再婚した文成公主と混同したためか，或いは先代に編まれた史書を無批判に受け容れたためであったと思われる。しかし『唐書』の記述を参考にして編まれたとされる『紅史』のような史書が依然として‘髭の祖父’の伝説とティソン王の金城公主実母説を支持していることを考慮すれば，後世のチベット人の歴史家たちにとって，古代のチベット王が唐王室から妃を娶ったと記すことに特別な思い入れがあったか，或いはナナム氏出身の女性を王妃として記述することに何らかの躊躇いがあったと見るべきかもしれない。

既に見たようにナナム氏出身の尚論はティソン・デツェン王政下においてその勢力を著しく伸ばしたことで知られる。彼らの中には仏教導入に貢献したとされる人物もいたが，例えば『カーンド・イェシェツォゲル・ナムタル』に「悪しき因のポン［教］はチベットのあらゆる地方に広まり，施主は大部分が尚論であった」［*YTsh*:131.12-13］と記されているように，ポン教を信奉する大臣が少なくなったとも伝えられる。唐王室の血脈を継ぐことを自ら宣言したとする前述のティソン・デツェン幼少期の逸話は，彼がポン教を信仰する尚論たちの活動を嫌っていた筈であるという後世の仏教徒史家の見解を反映したものかもしれない。

尚，金城公主がジャンツァ・ラプンの死後，ティデ・ツクツェンと婚姻しナナム・サーに子を奪われるという逸話は，*Bzh C*には記されていない。

70) 〔rgya phrug gar mkhan〕［*Bzh A*:4.12, *Bzh B*:5.4］。ガルケンは「舞者」の意。『バシェ』には「中国の子［である］ガルケン・サンシ」〔rgya phrug gar mkhan sang shi〕［*Bzh A*:5.7, *Bzh B*:5.21］とも記される。仏教導入事業に貢献をしたことで知られるサンシ〔sang shi〕の幼名ないし綽名と思われる。トゥンカル・ロサンティンレーは「唐の大臣［であった］バー・デゥの子，サンシ」としている（dung dkar blo bzang 'phrin las, *bod kyi*

子の遊び相手として呈上した。

父王［=ティデ・ツクツェン］は正法を為さることをお望みになり，［仏］法はインドにおいて名高いので，インドの王の御心を捉えるために礼物と［バー・デゥをはじめとする］使者を南ネパール[71]へ派遣した。［使者たちは旅の途中,］ドンパプの峡谷[72]で霰が7日間降り[73]，生活に窮して空を見たところ，飛翔する5羽の鳥［が見えた。バー・デゥがそれら］に，4本の矢を同時に放つと，4羽の鳥［に矢が命中し，それら］が同時に死んだ。それは罪深いと皆で話し合ったということを，王子は【*Bzh A*:5】ダクマル［・オムブツェル宮殿］の池の前で慈しみの心を持って聞いた。

［また或る日，王子は,］遊び相手［であった］キュンポ・ツェツェ〔khyung po rtse rtse〕，キュンポ・ドゥムツク〔khyung po dum tshugs〕，チョクラ・モンラムバル〔cog la smon lam 'bar〕[74]，中国の子ガルケンと［ともに］5人で，池の中で遊んでいた。［すると］足の下の泥の中に，長い赤虫が現れた。王子が「ドンパプの峡谷でバー・デゥが同時に4羽の鳩[75]を殺したことが罪深いというなら，この虫を全部殺せば［その］罪は大きいのか，［それとも］大きくはないのか。」と言った。［これに対しキュンポ・］ドゥムツクは，「このような悪くないものを殺せば，［その］罪は甚だ大きいのです。［しかし,］こちらに害を与えるものや魚を殺せば家畜・食料は増えます」と言った。［また,］中国の子［ガルケン］は「中国のフル[76]という経典によれば，このようなものを殺せば[77]，その罪は極めて大きいと言われます」と言った。王子が「フルという経典にはどのように書かれているのか」と仰ったことに対し，中国の子［である］ガルケン・サンシ[78]は［王子に］十善の法〔dge ba bcu'i chos〕をお聞かせ申し上げた［。その］後，【*Bzh B*:6】［二人が］いつもそれについて話し合っているのを皆が気づき，［皆は］「これは行〔sgom〕である」と話し合い，「王子は［仏］法が好きだ」と言ったので[79]，［王は］サンシを含む4人に

---

chos srid zung 'brel skor bshad pa, op. cit., p.23）。

71) 〔lho bal〕［*Bzh A*:4.14, *Bzh B*:5.7］。［*KhG*:299.19］ではインド〔rgya gar〕とする。R.A.スタンに依れば，中国の文献において〔lho bal〕という語は，しばしば蛮族（barbarians）を含意するとされる（Stein, R. A., *Tibetica Antiqua I. Les deux vocabulaires des traductions indo-tibétaine et sino-tibétaine dans les manuscrits de Touen-houang*, p.164）。

72) 〔deng 'phabs kyis 'phrang〕［*Bzh A*:4.14］，〔dong 'babs kyi 'phrang〕［*Bzh A*:5.3, *Bzh B*:5.7, 14］。不明。［*Bzh C*:13b, 14a］は〔dong 'phams kyi 'phrang〕，［*KhG*:299.20］は〔dong phabs kyi 'phreng〕とする。

73) 〔sgung phabs sgung bdun bab〕［*Bzh A*:4.14-15, *Bzh B*:5.8］。［*KhG*:299.20］では〔khu 'phang dgung bdun bab〕。〔khu 'bangs dgung bdun bab〕の誤記と解した。

74) ［*KhG*:300.1］では〔cog la smon lam 'bad〕。

75) 〔pho ron〕［*Bzh A*:5.3, *Bzh B*:5.15］。〔phug ron〕の異体ないし誤記と解した。

76) 〔hur〕［*Bzh A*:5.6, 7, *Bzh B*:5.18, 20］。「律」(lǜ）の音写とも推測できるが仔細不明。

77) 〔skum〕［*Bzh A*:5.10, *Bzh B*:5.19］。〔bkums〕の異体ないし誤記と解した。

78) 〔rgya phrug gar mkhan sang shi〕［*Bzh A*:5.7, *Bzh B*:5.21］。前掲註70参照。

79) 〔'di sgom zhe mol nas/ rgyal bu chos dga' zer bas〕［*Bzh A*:5.8-9, *Bzh B*:6.1-2］。［*KhG*:300.9-10］には，王子とサンシが十善について話し合っている様子に「全ての尚論が気づき，“王子は［仏］法がお好きか”と尋ねたところ，“とても好きだ”と言った」〔zhang blon kun gyis tshor te rgyal bu chos la dga'am zhes dris par shing

［詔書を入れた］小箱を託し，その［フルという］経典を受け取るために［彼らを］使者として［中国に］送った[80]。［その際，王は使者たちに，自分の］命令を果たせば［=経典を持ち帰ることができれば］褒美を与える，果たせなければ殺すと言って［彼らを中国に］送った。

2.9 中国皇帝との謁見 ［*Bzh A*:5.11-6.13, *Bzh B*:6.4-7.12］

その後，［使者たちは］ケゥレゥの峡谷[81]に行った。その時，中国皇帝[82]の御前に［いた］ブムサン・ワンポ〔bum sangs dban po〕[83]の前に，ジュの縄に通じた者[84]が一人［居り，その者が］「今から3ヵ月後に西方から菩薩が一人，ここに使者としてやってくる」と言った。［ブムサン・ワンポが］「その者はどんな者か」と［質問］したところ，［ジュの縄に通じた者は］「その者の姿形[85]や特徴はこのようなものである」と言って，仮面を一つ描いた[86]。［ブムサン・］ワンポがそのことを中国皇帝にご報告申し上げたところ，［中国］皇帝は使者を送って，その者［=サンシ］をそこに居させず，その者に対しリムドを行った上で，私の前に出すべきであると［と命令］した。

その時，［チベットからの］使者が現れた。そして，中国の和尚がその者［=サンシ］に対し礼拝を行い，［中国皇帝の］命令どおりに［リムドを］して［中国皇帝の前に］送り出したので，中国皇帝もその者［=サンシ］に対し礼拝を行った。そして使者は中国皇帝に贊普の小箱を呈上した。中国皇帝は小箱［に入れられた詔書の要求］に即して［経典を］贈ることを決めた。そして中国皇帝は［サンシに対し］「汝がバー・デゥの子なら，ここで私の近臣〔nang blon〕【*Bzh*

---

tu dga' zer〕とある。

80) 『バシェ』には，サンシを含む使者たちが中国に派遣された時期は明確に記されておらず，［*PCh*:184.3-4］にも「その者［=ティソン・デツェン］が小さい時に」とだけ記されているが，トゥンカル・ロサンティンレーはティデ・ツクツェン王が唐の皇帝・玄宗〔zhon tsung〕の元にサンシをはじめとする4人の使者を送ったのは754年のことと推測している（dung dkar blo bzang 'phrin las, *bod kyi chos srid zung 'brel skor bshad pa*, op. cit., p.23）。

81) 〔ke'u le'u yi 'phrang〕［*Bzh A*:5.11, *Bzh B*:6.4］。『賢者喜宴』には〔ke'u le'i 'phrang〕［*KhG*:300.12-13］の他，「ケゥレの猛獣の峡谷」〔ke'u le gcan gzag gyi 'phrang〕［*KhG*: 301.6-7］という表現も見える。

82) 唐第6代皇帝・玄宗（685-762, r.712-756）を指すと思われる。

83) 〔bum sangs dbang po〕［*Bzh A*:5.11, *Bzh B*:6.5］。ブムサンという地域の支配者を指すと思われるが，仔細不明。

84) 〔ju zhag mkhas pa〕［*Bzh A*:5.11-12, *Bzh B*:6.6］。前掲註37参照。トゥンカル・ロサンティンレーは中国に滞在していたポン教徒ではなかったかと推測している（dung dkar blo bzang 'phrin las, *dung dkar tshig mdzod chen mo, op.cit,* p.874）。

85) 〔cha tshug〕［*Bzh A*:5.13］，〔cha tshugs〕［*Bzh B*:6.8］。［*KhG*:300.15］の記述に基づき〔sha tshugs〕の誤記と解した。

86) 〔'bag gcig bris〕［*Bzh A*:5.13, *Bzh B*:6.8］。［*PG*:53.16］は「形像を描き」〔gzugs brnyan bris〕とする。「ジュの縄に通じた者」が占いを通じて感得した似像を何らかのかたちでブムサン・ワンポに示しことを意味していると思われる。尚［*PCh*:184.4-5］はこの形像を作成した人物を「神通力を有する和尚」〔hwa shang

A:6】となるべきではないのか」と仰った。［これに対しサンシは］「その思いでここに居りますれば今生は幸福でございますが，［本日，私は］チベットの地に良き法の源が生まれるために，仏陀の経蔵の見本程度のものを贊普に呈上し，後の方便とすることをご報告しようと思っております。私がここに居ることをお許し下さることは大変ありがたいことですが，チベットの贊普の命令は非常に厳格であるため，私の行為によって父が殺されれば心が痛みます。［従って私は］再びチベットに戻り，父と話し合い，方便として【*Bzh B*:7】［チベットの贊普の］臣民となります。」と申し上げたところ，中国皇帝は「汝が私の心を害さないとすれば，汝はどんな褒美が欲しいのか」［と仰った。そこで］使者は「褒美を下さるのなら，仏陀の1,000巻の経典を賜りたい」と言うと，中国皇帝は「汝はケゥレゥの峡谷にやってきたときにも，害が生じないようにリムドを十分に為した。ブムサン・ワンポは，汝［をさして］菩薩の化身がやってくると言った。神通力を持つ和尚も汝に礼拝を行った。［以上の］汝の行為と合わせ［て考えてみ］れば，仏陀の教言に，最後の500［年期］[87]に赭面の国[88]に正法の源をもたらす善友がやってくるという予言［があるが，］それが汝であることは間違いない。私も手助けをするべきであろう」と言って，群青色の紙[89]に金液〔gser chu〕で書かれた［仏］法［の経典］1,000巻を［チベットの使者たちに］下賜した。［また，中国皇帝は］褒美［として］他にも高価なものを下賜した［。その］後，5人の使者は再びチベット地方へ去った。

2.10　キム和尚の予言　［*Bzh A*:6.13-7.10, *Bzh B*:7.12-8.9］

［使者たちがチベットに戻る］道中，旅人の通り道を塞ぐ大きな岩が［があり，これまでに］それを見た者は皆，崖から落ちて[90]死んでいる［と言われていた］。それを，エクチュ[91]の町の，虎に首輪を掛ける［力を持ち，神通力を有する[92]］ニマ［=キム？］和尚[93]が［自身の］戒師に命じられて[94]エクチュにやってきた。そして［3日間瞑想を行ったことにより[95]］岩が砕け

---

mngon shes can〕とし，「ジュの縄に通じた者」に言及しない。

87)　〔lnga brgya tha ma〕［*Bzh A*:］［*Bzh B*:］。仏陀の教説が存在する期間を5,000年とした場合の最後の500年を指し，仏陀の教説が形だけ残る時期を言う。プトゥン・リンチェンドゥプは「出家というしるし以外に真の見解と行を伴わないので，しるしだけを持する期間〔rtags tsam 'dzin pa'i le'u〕であり，これが最後の500［年期］〔lnga brgya mtha' ma〕とされるものである」としている［*PCh*:136.4-5］。

88)　前掲註5参照。

89)　〔thing shog〕［*Bzh A*:6.12］，〔mthing shog〕［*Bzh B*:7.10］。［*KhG*:301.13］の記述に基づき後者を採った。

90)　〔sbos grir〕［*Bzh A*:6.14, *Bzh B*:7.13］。［*KhG*:301.15］の記述に基づき〔rbab grir〕の誤記と判断した。

91)　〔eg cu〕［*Bzh A*:6.14, *Bzh C*: 9a, l0b］，〔eg bcu〕［*Bzh B*:7.13］。［*KhG*:301.19］では〔eg chu〕。現在の中国・四川省の省都・成都の古名と思われる。

92)　［*KhG*:301.301.16-17］の記述〔stag la ga sha 'gel nus pa mngon shes yod pa〕により訳文を補った。

93)　〔nyi ma hA shang〕［*Bzh A*:6.14, *Bzh B*:7.13］。後述する「キム和尚」〔kim hA shang〕［*Bzh A*:10.3, *Bzh B*:11.9］の誤記と思われる。［*KhG*:301.16］は〔ki ya hwa shang〕とする。後掲註147参照。

94)　〔mkhan por bskos nas〕［*Bzh A*:6.15, *Bzh B*:7.14］。この記述を採れば「戒師に就任し」の意であるが，本稿では［*KhG*:301.17］の記述に基づき〔mkhan pos bsgos nas〕の誤記と判断した。〔mkhan po〕は僧院長，或い

た[96]。そして［そこに］仏堂〔lha khang〕を建てた。そこで使者［=サンシ］は［キム和尚から］瞑想の教言を得たのち，「私の父と会ったか。チベットには最終的に仏陀【*Bzh A*:7】の法は根付くであろうか。チベットに仏陀の経典がひろまれば，チベットのゲク〔bgegs〕やシン〔srin〕［等といった］生命〔srog〕を脅かすものは生じないだろうか。贊普の父子は［今後も］平安であろうか。」と尋ねたところ，［和尚は]その神通力によって見て，「贊普は逝去し，［その時,］王子はまだ幼いので，黒いものを好む大臣がティム・ブチュン[97]［という法律］を制定して［仏］法を破壊する。守護尊があるダクマル・ディンサンは根元【*Bzh B*:8】から崩れ落ちる。［それ故，王子が成長するまでは,］汝［=サンシ］が贊普の付き添いをなされよ。そして将来，その王子が成長し，その御口で外道の法を論じるようになった時，これをお聞かせ申し上げよ。そこで王子は信心を起こす。［そうしたら,］その後でこれをお聞かせ申し上げよ。［そこで王子の］信心が深まったその後で［更に］これをお聞かせ申し上げることにより，王子は［仏］法を為すようになる。」と予言し，3つの経巻[98]を授けた。［さらにキム和尚は,］「チベットには［仏］法の縁がある［ので］最終的に［仏］法は広まることになる。その善友は，サホル王の子であるシャーンタラクシタ[99]という比丘［であり，チベットはそ］の［者によって］教化される縁にあるのである」と仰った後，2ヶ月間，食物を捧げた。

2.11 五台山 ［*Bzh A*:7.10-16, *Bzh B*:8.9-18］

その後［使者たちは再びチベットに向かい,］2日間［の旅程］が経過した［後，互いの足下に触れて礼拝をして別れた[100]］。その後，サンシは，［ダクマル・］ディンサンが破壊されることに心を痛め，試みの5人[101]［と共に］，中国の山［である］五台山[102]の頂上に，鬼神の靄に

は学識深い賢者・学者等を指すこともあるが，ここでは僧侶が親しく教法を授かった師，特に出家の際に戒を授けた法師を指すと思われる。

95) ［*KhG*:301.17］の記述〔zhag gsum bsgoms pas〕によって訳文を補った。

96) 〔bskums〕［*Bzh A*:6.15, *Bzh B*:7.15］。〔bkrums〕の誤記と解した。

97) 〔khrim bu chung〕［*Bzh A*:7.3］，〔khrims bu chung〕［*Bzh B*:7.20］。後者が正しい。後にマシャン・ドムパキェをはじめとする廃仏派の大臣が制定したとされる法律（後掲註127参照）。

98) 後述する『十善経』〔dge ba bcu'i mdo〕,『金剛経』〔rdo rje gcod pa〕,『稲竿［経］』〔sa lu ljang pa〕の三書を指すと思われる。

99) 〔za hor rgyal po'i bu shan ta ra kShi ta〕［*Bzh A*:7.9］，〔za hor rgyal po'i bu shAn ta ra kShi ta〕［*Bzh B*:8.8］。サホルは現在の北インド，ヒマーチャル・プラデーシュ州のマンディ（Mandi）付近に存在したとされる古代王国。サホルという語はベンガルを指す古代語，或いはペルシャ語で町を意味するŚahorの転訛ともされる。チベットの歴史書ではシャーンタラクシタをサホルの王子とするものが多いが，「サホルの比丘」〔za hor gyi dge slong〕［*PG*:53.22-54.1］,「サホルの戒師(賢者)」〔za hor gyi mkhan po〕［*DCh*:126.4］のように王族の出身であったことを明記しないものもある。

100) ［*KhG*:302.12］の記述〔gcig la gcig rkang pa la phyag byas te gyes so〕により訳文を補った。『賢者喜宴』ではこのようにキム和尚が途中まで見送りにきたとしている。

101) 〔bsad mi lnga po〕［*Bzh A*:7.11, *Bzh B*:8.11］。〔sad mi lnga po〕の誤記と解した。［*KhG*:302.13］では「5人の

覆われる中，7日で建てられた［という］聖文殊宮[103]を手本とするために［五台山へ］向かった。［しかし，5人の使者たちのうち］一人は山に登ることができず，一人は頂上に行ったが何も見えず，一人は仏堂が見えたが［中に入る］門が見つからず，一人は門が見えたが棘のある樹[104]に阻まれて進むことができなかった。［そこで］サンシが［一人で仏堂の］中に入って聖者［=文殊菩薩］に礼拝し，それを手本として[105]門［の外］に出たところ，あらゆる野獣が［サンシに］礼拝し，［サンシを］山の麓へ連れて行った。その後，［使者たちは再び］チベットに向かった。

2.12　マシャン・ドムパキェの破仏　［*Bzh A*:7.16-8.15, *Bzh B*:8.18-9.18］

チベットでは，父王［=ティデ・ツクツェン］がヤンドー・バーツェル[106]で落馬して亡くなった[107]。［その時,］王子は未だ幼かった【*Bzh A*:8】ので，尚［論］マシャン・トムパキェ[108]

使者」〔pho nya ba lnga po〕とする。チベット初の出家集団を形成するために選択された‘試みの7人（預試七人）’〔sad mi (mi) bdun〕と呼応する表現にも見える。

102) 〔rgya'i ri mgo rde'u shan〕［*Bzh A*:7.11-12, *Bzh B*:8.11］。［*KhG*:302.23-303.1］には「その山は五台山として広く知られるものである」〔ri de ni ri bo rtse lngar grags pa de yin no〕とある。

103) 〔'phags pa 'jam dpal gyi pho brang〕［*Bzh A*:7.12-13, *Bzh B*:12-13］。［*KhG*:302.15］では〔Arya many+dzu'i pho brang〕とする。

104) 〔gra ba〕［*Bzh A*:7.15, *Bzh B*:8.15］。〔gra ma〕の誤記ないし異体と解した。［*KhG*:302.18］では「網のようなもの」〔dra ba 'dra ba〕とする。

105) ［*KhG*:302.19-22］には「文殊などの全ての菩薩に礼拝して供物を捧げ，全ての羅漢にも礼拝と供養を行い，全ての聖者と対話してその坐姿を手本とするために心に留めて」とある。

106) 〔yar 'brog sba tshal〕［*Bzh A*:7.17, *Bzh B*:8.18］。トゥンカル・ロサンティンレーは〔rgya ma yar snon sgra tshal〕とし，これをホルカン家の荘園所在地として名高いギャマ・ティガン〔rgya ma khri sgang〕に比定している（dung dkar blo bzang 'phrin las, *bod kyi chos srid zung 'brel skor bshad pa*, op. cit., p.23. Keith Dowman, op.cit., p.103）。

107) 『バシェ』［*Bzh A*:7.17, *Bzh B*:8.18-19］ではティデ・ツクツェン王の死因を落馬によるものとしているが，ラサのポタラ宮の前のショル石碑〔zhol rdo ring〕の南面にはティデ・ツクツェンは2人の大臣に暗殺されたという記録も遺されている。その概要は以下の通りである。755年，ティデ・ツクツェン王はバル・ドンツァプ〔'bal ldong tshab〕とランニェー・スィク〔lang myes zigs〕という2人の大臣によって暗殺された。後日この暗殺事件の証拠を掴んだ大臣タクダ・ルコンは，ティソン・デツェン王にその証拠を突きつけ，このままでは王国が混乱し，彼らはいつか貴方の暗殺を企てることになるだろうと述べた。タクダのこの行為に憤慨した二人の大臣は蜂起したが，タクダの率いる軍によって制圧された。タクダ・ルコンは王と国家に対する功労を高く評価されて褒美を得た（H. E. Ricardson, *A Corpus of Early Tibetan Inscriptions*, Royal Asiatic Society, London. 1985, pp:1-25）。この石碑は764年頃，当時軍務に従事していたと思われるタクダ・ルコンという人物の名の下に建てられたものであり，それゆえ以上の記録は公平さを欠くものではある。ティデ王暗殺の嫌疑を掛けられた二人の大臣の証拠は不十分なものであり，全てはタクダ・ルコンの策略であったかもしれない。このほか，ティソン・デツェン王の暗殺は，その子息であるティソン・デツェン自身の提案であったと見る説（C. I. Beckwith, "The Revolt of 755 in Tibet", In: *Weiner Studien*

は，「王[109]の御寿命が短かったのは，［仏］法を為したことによる報いで［あり，仏法は］不吉である。来世［において］生を受けるというのは偽りである。今生の障碍の排除をポン［教］は【*Bzh B*:9】為す。［今後，仏］法を為す者は，独身のまま辺境で永遠に物乞いをせよ。今後はポンを為す者しかいなくなる。ラモチェ［寺］の中国の釈迦牟尼像[110]は，再び中国に運べ」と言って，［釈迦牟尼像を］皮縄の網[111]に入れ，［ラモチェ寺の］門［の外］に出した[112]。そして300人が［その網を］引っ張った［が，その］後，カルダク[113]から［向こうに］運ぶことができず[114]，［やむを得ず］砂の下に埋めた。ラサの［ラモチェ寺の］堂守〔dkon gnyer〕［をしていた］年配の和尚は中国へ追放された。［その和尚は］その靴の片方をチベット国に残し，「またすぐに，［チベットに仏］法の火花はやってくる」と言った[115]。

---

zur Tibetologie und Buddhismuskunde. Nos. 10-11.［Ernst Steinkellner and Helmut Tauscher, eds. Proceedings of the Csoma de Korös Symposium Held at Velm-Vienna, Austria, 13-19 September 1981. Vols. 1-2.］Vienna, 1983, pp.1-16.）もあり，彼の死因は依然として謎に包まれている。

尚，［*KhG*:303.2-3, *ML*:201.23-202.2, *PG*:53.19］に依れば，ティデ・ツクテン王の陵墓は「ムラリ」〔mu ra ri〕に建てられ，墓の列は幻術の王〔'phrul gyi rgyal po〕の左，墓の名はラリ・ツクナム〔lha ri gtsug nam〕であるされる。幻術の王〔'phrul gyi rgyal po〕とはティデ・ツクテンの父，ドゥーソン・マンポジェ（ティ・ドゥーソン・マンポジェ・ルンナム・トゥルギ・ギェルポ〔khri 'dus srong mang po rje slung nam 'phrul gyi rgyal po〕とも呼ばれる）を指す。

108) 〔ma zhang khrom pa skyes〕［*Bzh A*:8.1, *Bzh B*:8.19-20］。〔ma zhang grom pa skyes〕［*PCh*:184.17, 185.5, *KhG*:303.13］とも記される。ティソン・デツェン王の母の家系であるナナム氏出身の尚論とされ，後述するティム・ブチュン〔khrims bu chung〕と呼ばれる廃仏法を制定して仏教を弾圧したとされる。ティソン・デツェン王時代の歴史について叙述する殆ど全ての史書がこの人物に言及しているが，敦煌出土のチベット語文献にはこの人物に該当すると思われる大臣の名前は現在のところ見あたらない。

109) 〔rgyal bu〕［*Bzh A*:8.1, *Bzh B*:8.20］。［*KhG*:303.13］の記述に基づき〔rgyal po〕の誤記と解した。

110) 〔ra mo che'i rgya lha shAkya mu ne〕［*Bzh A*:8.3, *Bzh B*:9.2］。逐語訳では「ラモチェの中国の神・釈迦牟尼」となるが，ここで「中国の神」〔rgya'i lha〕は文成公主によってもたらされたと伝えられる釈尊像を指す。〔lha〕が仏像を指す例は［*PCh*:184.10, 11 etc.］等にも見いだせる。

111) 〔'grengs pa'i gra ba〕［*Bzh A*:8.4］，〔'brengs pa'i dra ba〕［*Bzh B*:9.3］。〔'breng pa'i dra ba〕の誤記と解した。

112) 〔sgor bston〕［*Bzh A*:8.4］，〔sgor bton〕［*Bzh B*:9.3］。後者を採った。

113) 〔mkhar brarg〕［*Bzh A*:8.5, *Bzh B*:9.4］。ティデ・ツクテン王が建立したとされるラサ・カルダク〔lha sa mkhar brag〕或いはその付近を指すと思われる（前掲註17参照）。

114) 〔ma 'khul〕［*Bzh A*:8.5, *Bzh B*:9.4］。〔ma 'khur〕の誤記と解した。

115) ［*Bzh C*:4b］ではこの年配の和尚はラモチェの和尚であり，中国からチベットに嫁いだ公主〔ong jo〕の随伴者であったとしている。マシャン・ドムパキェが追放した和尚がチベットに片方の靴を残したという逸話はチベット人歴史家たちが著した史書に広く見られる。例えば15世紀に活躍した仏教僧シュンヌペルの『青史』 には次のようにある。「ティソン・デツェンが王になった時，マシャンという強力な権力を持つ大臣が［居た。彼は仏］法を嫌ったので，出家者［=仏教僧］たち〔rab tu byung ba rnams〕を他国に連れ出し，ラサの釈尊像をキロンに運び出し，諸々の経堂を屠場にした。王は仏法を信仰していたが権力がなかった。ラモチェ寺に居を据えていた和尚たちが中国に帰るとき，その中の長老［の一人］が片方の靴を残して，“またチベットに教説がやってくることになろう”と言った［。その言葉の］とおり，私［=シュ

［ラサの］カルダクは基礎から崩され，［ダクマル・］ディンサンは破壊され，その［=ダクマル・ディンサンの］鐘[116]はチムプの岩［山］[117]に運ばれた。ラサ［のラモチェ］に工房を建て［そこを］屠場にされ[118]，仏像[119]には［動物の］赤い皮がかぶせられ，［仏像の］手で臓腑が乾かされた。［また，仏］法を好んだことにより，ランとベルという2人の大臣が罰せられ，黒いチベットへ送られた[120]。その時期，ナナム・ティトジェ・タンラバル[121]は北方の荒原に

ンヌペル］のところまで仏教の教えは至った。［また］その言葉を人づてに聞いた正法の放棄を喜ぶ一部の者たちは，［その時に残された片方の靴は］大乗和尚が残した靴であると言っている。」［*DNg*:66.9-17］。このようにシュンヌペルは，マシャンの弾圧によってチベットを追われた中国僧の中に，後にチベットで中国禅布教の騎手として活躍することになる大乗和尚が含まれていたと主張する者がいると指摘したうえで，これを「正法の放棄を喜ぶ一部の者たち」〔dam pa'i chos spong bar spro ba 'ga' zhig〕の意見であるとして退け，大乗和尚が早い段階からチベットに到っていたことを強く否定している。シュンヌペルが主張するように，恐らく大乗和尚は，チベットによる敦煌陥落以後に入蔵した可能性が高いと思われるが，大乗和尚の入蔵時期に関する伝承に『青史』が慎重になっている理由は，単に歴史的誤謬を正すためではなく，嘗てマシャンによる弾圧を受けた同じ仏教徒の中に，やがてインド仏教の論敵となる大乗和尚を含めることを嫌ったためでもあると思われる。大乗和尚の宗義はチベット語でチクチャルワ（頓悟派）と呼ばれ，プトゥンの言葉を借りれば「身・語の善なる法行を行うことによっては悟りを得ない［と主張する］。無努力に留まるときに悟りをえる，という断見に執着して善行を行わない」［*PCh*:187.21-22］という性格を持つものであったともされる。

116) 〔lcong〕［*Bzh A*:8.8, *Bzh B*:9.8］。［*KhG*:304.19］の記述に基づき〔cong〕の誤記ないし異体と解した。［*KhG*:304.20］では，この鐘について「まさしくそれが後のサムイェのゲゲーの鐘である」〔de nyid phyis bsam yas dge rgyas kyi cong lags〕としている。ゲゲー〔dge rgyas〕とは，サムイェ寺の建立の際，ティソン・デツェン王の妃の一人であったブロサ・チャンチュプメン〔'bro bza' byang chub sman〕のために建立されたと伝えられるゲギェー・チェマリン〔dge rgyas bye ma gling〕寺（［*PCh*:186.8-11, *KhG*:350.9］参照）を指すが，ゲギェー・チェマリンの鐘はブロサ・チャンチュプメンの希望によって作られたという伝説もあり，となればツグラー・テンワの見解と矛盾することになる（ゲゲー・チェマリンの鐘については，Hugh Edward Richardson, *A corpus of early Tibetan inscriptions*, Royal Asiatic Society, 1985, pp.32-33を参照）。尚，ブロサ・チャンチュプメンは後に大乗和尚が説く禅に傾倒し，彼の信者として剃髪出家したとも伝えられる（彼女の出家後の名はジョモ・ジャンチュプ〔jo mo byang chug〕である）。

117) 〔rdza〕［*Bzh A*:8.8, *Bzh B*:9.8］。［*KhG*:304.19］は〔g.ya'〕とするが，これも岩山も意味する。

118) 〔ra sar gzo gra gtsugs bshas byas〕［*Bzh A*:8.8］，〔ra sar bzo grwa gtsugs bshas byas〕［*Bzh B*:9.8-9］。後者を採った。［*PCh*:184.9］では「ラサを屠場にしたのである」〔lha sar bsha' ra byas so〕，［*DNg*:66.12］では「諸々の経堂を屠場にした」〔gtsug lag khang rnams su bshas ra byas〕とする。また［*PG*:54.5］は，屠場とされたのは「トゥルナン［寺］」〔'phrul snang〕であったとしており，トゥンカル・ロサンティンレーは「ラモチェと経堂の二つ（或いは二つの経堂）を工房と屠場にした」としている（dung dkar blo bzang 'phrin las, *bod kyi chos srid zung 'brel skor bshad pa*, op. cit., p.23）。尚，*Bzh C*では「ラサ・ヘハル」〔ra sa pe har〕を屠場にしたとあり，［*KhG*:304.21］では「ラサのビハルを工房にした」〔lha sa bi har du bzo gra bgyis〕とあるが，ここでヘハル及びビハルはVihāraの音写と思われる。

119) 〔lde bzo〕［*Bzh A*:8.8］，〔lder bzo〕［*Bzh B*:9.9］。後者を採った。泥でつくった像，塑像の意。

120) 〔chos la dga' bas blon mang dang 'bal gnyis la skyon phab bod nag por btang〕［*Bzh A*:8.9-10, *Bzh B*:9.9-11］。

連れて行かれ，「ああ」と三度ほど叫びながら悶絶して[122]死に，チョクロ・キェーサン・ギャルマ[123]は舌と手足が悉く干からびて死んだので，上・下の人や観相師〔bltas mkhan〕［たち］はみな一致して，中国の神［=仏像］が怒ったのであり，［仏像を］地面の穴[124]に埋めた罪は大きい［と言た。］そして中国の神［=仏像］の最初の父祖はインド国からやってきたはずなので，［以前にカルダク付近に埋めた仏像を］インドに近いマンユル[125]へ運ぶことになった。そして［その仏像を］砂の穴から取り出したのち，2匹の子ラバを輿にして上方へ［=マンユルのキロンへ］運んだ[126]。そのとき［マン］ユルでは大きな災害が起こった。

［*KhG*:303.15-17］では「［仏］法を好むマン〔mang〕とベル〔'bal〕という二人の大臣が罰せられ，黒いチベットに送られた」とする。マン〔mang〕は恐らくラン〔lang〕の誤記であり，二人の大臣とは，ランニェー・スィク〔lang myes zigs〕とバル・ドンツァプ〔'bal ldong tshab〕を指すと思われる。

『バシェ』では，これら二人の大臣は仏教を信仰したためにマシャン・ドムパキェに罰せられ，黒いチベット（辺境）に追放されたとしているが，前掲註107で述べたようにショル石碑〔zhol rdo ring〕には二人の大臣はティデ・ツクツェン王暗殺の嫌疑をかけられ失脚したと記されており，彼らが追放された理由に関する記述が異なっている。また彼らが追放されたとされる「黒いチベット」〔bod nag po〕の具体的な場所については，敦煌出土の『年代記』［*P.T.*1288.104］に，未年（乙未，755年）にランとベルがトンスー〔mtong sod〕へ追放されたという記述も見える。

121) 〔sna nam thog rje thang la 'bar〕［*Bzh A*:8.10, *Bzh B*:9.11］。〔sna nam khri thog rje thang la 'bar〕の誤記と解した。［*PCh*:184.9, *PG*:54.5-6］でもナナム氏出身の大臣とするが，［*KhDC*:301.9］では〔'chims khri thog rje thang bar〕，即ちチム氏出身とする。

122) 〔rgyab gas〕［*Bzh A*:8.11, *Bzh B*:9.12］。［*KhG*:305.1］の記述に基づき〔brgyal brgyal〕の誤記と解した。

123) 〔cog ro skyes bzang rgyal ma〕［*Bzh A*:8.11, *Bzh B*:9.12-13］。［*Bzh C*:4a, 4b, *KhG*:305.2-3］の記述に基づき〔cog ro skyes bzang rgyal 'gong〕の誤記と解した。［*PG*:54.6］では〔lcog ro skyes bzang rgyal mgo〕，［*KhDC*:301.9-10］では〔lcog ro skyes bza' rgyal gong〕，［*PCh*:184.10］では〔cog gru skyes ngas rgyal 'gong〕とする。敦煌出土の『年代記』［*P.T.*1288.105］に依れば，ランニェー・スィク大臣とバル・ドンツァプ大臣が追放された翌年（〈丙〉申年，756年），この人物（ケーサン・ギャルコン大臣〔blon skyes bzang rgyal kong〕）が両大臣の財産を整理したとされる。

124) 〔sa thems〕［*Bzh A*:8.13, *Bzh B*:9.15］。［*KhG*:305.4］の記述に基づき〔sa thams〕の誤記と解した。

125) 〔mang yul〕［*Bzh A*:8.14, *Bzh B*:9.16］。現在のチベット自治区・ガリ（阿里）〔mnga' ris〕地方のプレン（普蘭）〔spu hreng〕県からツァン（蔵）〔gtsang〕地方のンガムリン（昂仁）県と吉隆（キロン）県一帯と，ネパール・カトマンドゥ盆地の北方に位置するトリスリ（Trisuli）の間に位置する地域の古名。「ガリの三地域」〔mnga' ris skor gsum〕と呼び慣わされる西チベットの三地域の一つでもあり，古代チベット王国崩壊後は，10世紀に西チベットに落ち延びた王家の末裔キーデ・ニマグン〔skyid lde nyi ma mgon〕の長子ペーデ・リクパグン〔dpal lde rig pa mgon〕に統治されたとされる。嘗てマンユルは中国やチベットの旅人にとってネパールやインドへの玄関口であり，657年には唐皇帝の使者がこの地に立ち寄った際，碑文を残したともされる（Pasang Wangdu, H. *Diemberger, Ngag Dbang Skal Ldan Rgya Mtsho: Shel Dkar Chos'byung. History of the White Crystal. Veroffentlichungen Zur Sozianlanthropologie*, Austrian Academy of Sciences Press, 1996, pp.56-63）。

126) ［*PG*:54.7-8, *PCh*:184.10, *DNg*:66.11, *DM*S:24a.6］は「マンユルのキロン」〔mang yul skyid (g)rong〕，トゥンカルは「ガリのキロン」とする〔mnga' ris skyid grong〕（dung dkar blo bzang 'phrin las, *bod kyi chos srid zung*

2.13　バ・セーナンの回心　［*Bzh A*:8.16-9.13, *Bzh B*:9.18-10.16］

そして，死亡した国民に対し［死者供養の儀礼である］ツェ〔tshe〕を為してはならないというティム・ブチュン[127]［という法律］が制定された後，バラムのラク[128]でバ・【*Bzh A*:9】セーナン〔sba gsal snang〕の息子と娘の二人が同時に亡くなった[129]。神の父祖[130]は皆，「［仏］法は正しい」と言う［ので］，和尚に尋ねようと思い，ケンカンから【*Bzh B*:10】年配の和尚を呼んで[131]，「［亡くなった］私の二人の子に道をお示し下さい。また，前世と来世［があるというの］は真実であろうか。」と申し上げたところ，「前世と来世はある」と言うので，表面上はポン［教の儀礼］を行い，内々には偽装して[132]［1,000の神々に食べ物を授け[133]］ツェ［の儀礼］を行った。［さらに］和尚が「［汝は自分の］子供が神として生まれるのが良いか，それ

'brel skor bshad pa, op. cit., p.25）。現在のチベット自治区・吉隆（キロン）県付近に比定される。

127) 〔khrims bu chung〕［*Bzh A*:8.16, *Bzh B*:9.19］。マシャン・ドムパキェをはじめとする廃仏派の大臣たち（［*PG*:53.21］に依れば「奸臣たち」〔bdud blon rnams〕）が仏教弾圧を目的として制定されたと伝えられる法律。［*KhG*:304.23-305.1］に「中国の神法を行っていると独身のまま永久に［辺境へ］追放するというティム・ブチュンが制定された」とあり，金城公主によってもたらされた死者供養（ツェ）が禁止されたともされることから，当初は中国から移入した宗教伝統に対する弾圧を主眼としたものであったとも考えられる。尚，トゥンカル・ロサンティンレーは，この法に背いた者は辺境に追放されるだけでなく財産も国に没収されたとしている（dung dkar blo bzang 'phrin las, *bod kyi chos srid zung 'brel skor bshad pa*, op. cit., p.25）。

128) 〔ba lam rlags〕［*Bzh A*:8.16, *Bzh B*:9.19］。［*KhG*:305.8, *PCh*:184.12］では〔ba lam glag〕。バラム〔ba lam〕のラク〔glag〕という地名と思われる。バラムは現在のチベット自治区ラサ市の東部，キチュ川沿岸の地域の达孜（タクツェ）県に属する地域を指す。恐らくセーナンの故郷であり，『バシェ』では後にセーナンがラクという地に寺院を建てたともされる。また敦煌出土の『年代記』［*P.T.*1288.28］には（丁）丑年（667年）にマンロン・マンツェン王〔mang slong mang brtsan〕の遺体がバラム〔ba lam〕に安置されたという記述もみえる。

129) ［*PG*:54.9-10］では「セーナンの娘が亡くなった」とし，男子に言及しない。

130) 〔lha'i yab mes kun〕［*Bzh A*:9.1, *Bzh B*:9.21］。歴代の古代チベット王たちを指すと思われる。

131) 〔khen khang nas hA shang rgad po bos te〕［*Bzh A*:9.21］，〔khen khang nas hA shang rgad po bod te〕［*Bzh B*:9.21］。〔khen khang〕の意味不明。〔khen〕は八卦の乾卦の意である。［*KhG*:305.10］は〔hen khang〕とする。［*Bzh C*:5a］では，セーナンはラモチェから和尚を呼んだとしているが，既に見たように*Bzh A*, *Bzh B*ではラモチェに滞在していた和尚たちは既にマシャン・ドムパキェをはじめとする廃仏派の大臣たちによって中国へ追放されている。この矛盾についてダライラマ5世は『西蔵王臣記』の中で，セーナンの子供たちが亡くなる前後にサンシは新たな和尚と共に中国から帰国した，そしてその和尚がセーナンの子供たちの葬儀を行った人物であると主張している（後掲註140参照）。

132) 〔'gyod kha dang gros te〕［*Bzh A*:9.3-4, *Bzh B*:10.3］。［*KhG*:305.12］の記述に基づき〔gyod dang bsdos te〕の誤記と解した。

133) ［*KhG*:305.12-13］の記述〔lha mi stong la 'tshal ma bstsal nas〕により訳文を補った。

とも［再び汝の[134]］子として生まれるのが良いか」と言ったのに対し，父は「神として生まれるのが良い」と言い，母は「我が子として生まれるのが良い」と言った。［その後，彼らの］息子の骨に対し儀礼が行われ，遺体が宝石のような舎利となったことで，［息子は］神として身体［を得ること］は明らか［であると和尚は言った］。［また和尚は，］娘の口に，朱色の水で半分を塗った豆ほどの真珠を入れて［来世の存在を確かめるための］信頼のしるし〔yid chas pa'i rtags〕とした後，儀礼を行った。その後［和尚は，娘の遺体を］陶器の底に入れ，母の寝床の下に埋めて「来年，汝は［この母の］我が子として誕生する」と予言をした。翌年，再び［バー・］セーナンの妻に一人の子が生まれ，その［子の］口の中に半分が赤い真珠があった。母が寝床の下の陶器を開いたところ，跡は空であった。［更に，その子は］教わったこともないのに叔父[135]と叔母の名前も知っていたので，［セーナンとその妻は，］来世があると信じた。

その後，［セーナンは和尚から］瞑想の教えを授かり，［他の者には秘密にして常に[136]］実践していた時，［セーナンは］王〔rje〕［=ティソン・デツェン］のお耳に「私は仏陀の法を手に入れるために，インド[137]とネパールに行きます」[138]とした［=言った］ところ，王は「それなら，私は［汝を］マンユルの地方官に任命する」[139]と仰った。

2.14 サンシの帰国 ［*Bzh A*:9.13-11.8, *Bzh B*:10.16-12.14］

セーナンが上に去った［=マンユルに行った］後，サンシが使者の職務を果たし，再びチベットに［戻って］来た［。その］時，王はまだ幼かったので，中国の法〔rgya'i chos〕はチムプの岩［の中］に埋められた[140]。

---

134) ［*KhG*:305.14］の記述〔slar khyed rang gi〕により訳文を補った。

135) 〔zhing〕［*Bzh A*:9.10］，〔zhang〕［*Bzh B*:10.12］。後者を採った。

136) ［*KhG*:306.1］の記述〔gzhan la gsangs nas rtag tu〕により訳文を補った。

137) 〔rgya yul〕［*Bzh A*:9.12, *Bzh B*:10.14］。中国の意にも取れるが，［*KhG*:306.2］の記述に従い〔rgya gar〕の意に採った。

138) ［*PG*:54.13-14］には「セーナンは［仏］法のために南ネパール〔lho bal〕に行くことを王〔rje〕にお願いした」とある。

139) ［*PCh*:184.13］はセーナンをマンユルの地方官に任命したのは「王子」〔rgyal bu〕であるとし，ティソン・デツェンが未だ王位に就いていなかったとしている。

140) このように『バシェ』ではセーナンがマンユルに去った後，サンシがチベットに戻ったされているが，ダライラマ5世は『西蔵王臣記』の中で『バシェ』の記述に対し，次のように異論を唱えている。「…『バシェ』ではセーナンがマンユルに去った後にサンシが中国から戻ったと説明されており，［『賢者喜宴』の作者］パウォ・ツグラ〔dpa' bo gtsug lag〕もそれに従っているが，［これは］前後の語の矛盾の有無［について］の考察が為されていない出鱈目である。［即ち］和尚とは中国の法を説く阿闍梨であり，法規を破ったために，ラモチェ［寺］の和尚など，チベットにいた全ての和尚は追放されてしまった。［従って］セーナンの娘が［セーナンの］子として生まれるという予言をした人物は，サンシが新たに招聘した和尚であると見なすべきである。濁世の賢者［にして］一切の至宝であるシュンヌペル〔gzhon nu dpal ba〕の『青史』と，一切所知をご覧になる眼を有する化身［である］ガワン・ノルブ〔ngag dbang nor bu〕の『ドゥク派宗教

その後しばらくして王子［=ティソン・デツェン］は成長し，御父の一通の文書[141]を御覧になった。そして尚論たちと話し合い，「［文書に依れば］我が父祖曰く，我が人民の平安の役に立つ方法［である］中国のレゥツェキャン[142]を実践して，私の父祖は神通力を獲得した【*Bzh B*:11】ようだ[143]。」【*Bzh A*:10】と言った。［これに対し］大臣たち[144]が「中国の父祖〔rgya'i yab mes〕のレゥツェキャン〔le'u tshe kyang〕というのは，どのようなものですか」と言うと，［贊普はギャサン・メゴ〔rgya bzang me mgo〕に「私の父の治世に中国のレゥケツェ〔le'u ke tse〕という伝統がやってきたと知られているが，それは如何なるものか」と仰った。そこで[145]］メゴがレゥツェ［キャン］［について教えるために］文書を読んだところ，贊普は「［その伝統は大変素晴らしい。[146]］私の父祖は良き法の流儀を実践なさった。［そのおかげで］今や世間の良き行為が生じているのである。」［と仰った。］

サンシは考えて，［嘗て］キム和尚[147]が予言したのはこの時［=いま］であると思い，「中国

史』〔chos 'byung bstan pa'i pad+ma rgyas pa'i nyin byed〕には，サンシがチベットに到着した後，セーナンがトゥー〔stod〕に去ったという順序で著述されているが，これが理にかなっているのである」［*PG*:54.14-55.2］。

しかしダライラマ5世の主張は当時ラモチェに滞在していた和尚が一人残らず中国に追放されたという前提に立つ限りにおいて妥当性を持つものであり，何らかの理由で数人の和尚がチベットに留まった可能性を考慮に入れれば事情は異なる。尚，プトゥンは『バシェ』と同じくセーナンがマンユルの地方官に派遣された後，サンシはチベットに到着し法を岩に隠した（［*PCh*:184.14］）としており，また『賢者喜宴』［*KhG*:299.21-23］では，セーナンがシャーンタラクシタの招聘をティソン・デツェンに相談するためにチベットに一時帰国した後，サンシが帰国したとしている。

141) 〔yab kyi ye ge〕［*Bzh A*:9.15, *Bzh B*:10.19］。［*KhG*:308.21］では〔yab mes kyi yi ge〕，［*PG*:55.3］では「父祖たちの文書」〔mes rnams kyi yig tshang〕とする。

142) 〔le'u tshe skyang〕［*Bzh A*:9.16, *Bzh B*: 10.21］。文成公主が持っていたとされる「360の占いの表」〔gab rtse sum brgya drug cu〕（2.4.参照）を指しているとも思われるが仔細不明。『賢者喜宴』では〔le'u tshe〕［*KhG*:308.23, 309.1］，〔le'u ke tse〕［*KhG*:309.3］，或いは〔le'u tse〕［*KhG*:309.4］とし，表記が一定しない。

143) 〔rgya'i le'u/ tshe skyang dang sbyar na nga'i pha mes kyis 'khrul bsnyems pa 'dra te zer〕［*Bzh A*:9.16-10.1, *Bzh B*:10.21-11.1］。［*KhG*:308.23］では〔rna'i le'u tshe dang sbyar na nga'i yab mes kyis rdzu 'phrul bsnyed pa 'dra gsung〕とする。〔rgya'i le'u tshe dang sbyar na nga'i yab mes kyis rdzu 'phrul rnyed pa 'dra te zer〕の誤記と解した。

144) 〔blon bdag〕［*Bzh A*:10.1］，〔blon dag〕［*Bzh B*:11.1］。後者を採った。

145) ［*KhG*:309.2-4］の記述により訳文を補った。尚［*KhG*: 386.7-8］には後にチベットで流行した禅をティソン・デツェン王が弾圧した際，メゴ和尚〔hwa shang me mgo〕という人物が抗議し，自分の頭に火をつけて焼身自殺したと記されている。

146) ［*KhG*:309.5］の記述により訳文を補った。

147) 〔kim hA shang〕［*Bzh A*:10.3, *Bzh B*:11.5］。［*KhG*:309.8］では「予知力を有する和尚」〔hwa shang mngon shes can〕，［*PG*:55.4］ではただ「和尚」〔hwa shang〕とする。先にニマ和尚と呼ばれていた人物，即ち「王子が成長し，その御口で外道の法を論じるようになった時，これをお聞かせ申し上げよ。」［*Bzh A*:7.5-6, *Bzh B*:8.2-3］と言ってサンシに三つの経典を授けたとされる和尚を指すと思われる。キム和尚と当時のチベットの関係については，Matthew T. Kapstein, From Korea to Tibet: Action At a Distance in the Early Medieval World System, in: *The Tibetan assimilation of Buddhism : conversion, contestation, and memory*, Oxford University Press, 2000, pp.69-84参照。

の良き神法を得るならば，父祖［の］レゥツェキャンは王宮の入り口にも入れてはなりません[148]」とした［=と言った］ところ，贊普は「［それでは］中国のその良き神法の原理が汝には［あるのか，それとも］ないのか[149]」と仰った。［サンシは］「私は中国に居たので［それを］持っています」と言ったのち，［秘匿しておいた法を］チムプの岩山から取り［出し，それを］キム和尚の教えに従って［王に］献上した。そして，はじめに『十善経』〔dge ba bcu'i mdo〕を読んだ。そこで王子は信心を起こした。その後，『金剛経』〔rdo rje gcod pa〕を読むと，王子の信心は一層大きくなった。［さらに］その後，『稲竿［経］』〔sa lu ljang pa〕を読み，はじめに清浄なる行為〔spyod pa dag pa〕［というもの］を理解し，次に清浄なる見解[150]［というもの］を理解し，最後に行為と見解が一体となること［=見行双入］を理解し，［仏］法に信頼を寄せた。そして，「このような良き法の流儀が私の治世において得られたこと[151]は，［大］地の慈悲であり，空の慈悲である。全ての神々に感謝の贈り物を送ろう。セーナンが“［仏］法を行うべきである”と言ったことは正しかった。セーナンにはトルコ石を付した銀と大黄金を与えよう。サンシよ，汝にはオパール，トルコ石と小黄金を与えよう[152]。今こそ，汝が［招来した[153]］中国のダルマ[154]とマンユルのダルマと［を］，中国のメゴ〔mes mgo〕とインド[155]のアーナンタと［その他の］賢者たちが翻訳せよ」と仰った。

［そして，］それら2人とサンシを合わせた3人が，ヘーポリ[156]の砂の洞穴で【*Bzh B*:12】［法をチベット語に[157]］翻訳をしていた［時，彼らの］前に，タクラ大臣〔blon stag ra〕[158]とシャ

---

148) 〔le'u tshe skyang ste 'khrul ma'i gor yang mi chud〕［*Bzh A*:10.5］，〔le'u tshe kyang ste 'khrul ma'i gor yang mi chud〕［*Bzh B*:11.6-7］。［*KhG*:309.10］の記述〔le'u tse de dag de'i phru ma'i sgor yang mi tshud do〕に基づき，〔le'u tshe skyang de phru ma'i sgor yang mi tshud〕の誤記と解した。

149) 〔khod la med dam〕［*Bzh A*:10.6, *Bzh B*:11.8］。［*KhG*:309.12］では〔khyod la yod dam〕。

150) 〔blta bar dag pa〕［*Bzh A*:10.9］，〔blta ba dag pa〕［*Bzh B*:11.13］。後者を採った。前者を採れば「見解を浄化すること」の意になる。

151) 〔bsnyes pa〕［*Bzh A*:10.10］，〔brnyes pa〕［*Bzh B*:11.15］。後者を採った。

152) 古代チベットで行われていたとされる標章制度であるイクツァン〔yig tshang(s)〕に基づくものと思われる。この制度では上位から順にトルコ石〔g.yu〕・金〔gser〕・銀〔dngul〕・オパール〔phra men〕・銅〔zangs〕・鉄〔lcags〕の位が設けられ，さらにそれぞれを大〔che〕・小〔chung〕に分けることによって十二の位階が定められた。大臣たちは王国に対する貢献度に合わせ，上位の大臣にはトルコ石〔g.yu〕・金〔gser〕，中位の大臣には銀〔dngul〕・オパール〔phra men〕，下位の大臣には銅〔zangs〕・鉄〔lcags〕の標章が与えられた（dung dkar blo bzang 'phrin las, *dung dkar tshig mdzod chen mo*, op. cit., p.1853）。

153) ［*KhG*:310.2］の記述〔spyan drang pa'i〕によって訳文を補った。

154) 〔dhar ma〕［*Bzh A*:10.13］，〔rdal ma〕［*Bzh B*:11.19］。前者を採った。［*KhG*:310.3］では〔dharma〕とする。

155) 〔rgya〕［*Bzh A*:10.14, *Bzh B*:11.20］。［*KhG*:310.3］の記述〔rgya gar〕に基づきインドの意に解した。但し［*PG*:55.7］では「カシミールのアーナンダ」〔kha che A nan+ta〕とする。

156) 〔hal po ri〕［*Bzh A*:10.15, *Bzh B*:11.21］。［*KhG*:310.5］の記述に基づき〔has po ri〕の誤記ないし異体と解した。サムイェの北方に位置する山を指す（Keith Dowman, op.cit., p.225）。

157) ［*KhG*:310.5］の記述〔chos bod skad tu〕により訳文を補った。

158) 〔blon stag ra〕［*Bzh A*:10.15, *Bzh B*:12.1］。［*KhG*:310.6］では〔ta ra klu gong〕。『バシェ』にはタクラ・ルコ

ン・マシャン〔zhang ma zhang〕がやってきて，「おい，お前たち三人はそこでなにをしている。ここに居てはならない。それが法の語であるなら，ティム・ブチュン[159]により，法を行えば独身のまま永遠に追放されると聞いていないのか[160]。［誰にも］報告することなく洞穴の入り口を閉ざし，その後で法に則って［お前たちを］裁こうか」と厳しい口調で言った。

［サンシが］そのことを王〔rje〕［=ティソン・デツェン］に報告したところ，［王は］「ならば，セーナンがやってくるまでは［経典を］翻訳をしてはならない」と仰った。法を好む大臣たちは［王に］「サンシをセーナンのお供としてトゥ〔stod〕［=マンユル］へ送って下さい」と言ったところ，王は「我が勇敢にして賢明なる中国の子[161]は［仏］法を学んだことにより子も無い。使者として派遣して［その地で］亡くなれば残念だ[162]」と仰った。サンシは「小生の家系は途切れません。インドに比丘の戒律を破らない者が2人おり，2人は死んだ後，小生の子として生まれるのです」と言った。全ての大臣がサンシを，ここでサンシがシャンシュンから財を得る［ために派遣した］という経緯が書かれているが，それは他にある。原本は他にあり，

ン〔stag ra klu khong〕とタクダ・ルコン〔stag sgra klu khong〕という類似した名前を持つ二人の大臣が登場する。『バシェ』に依れば，廃仏派の大臣であったとされるタクラ・ルコンは，自分はポン教徒であると言ってサムイェ寺の建立に反対したため一時追放された［*Bzh A*:30.8-11］が，その後，ポン教様式の黒い仏塔を建立した［*Bzh A*:42.6-7］とされており，また『新紅史』にも「マシャン・ドムパキェ〔ma zhang brom pa skyes〕やタラルコン〔rta ra klu gong〕などの［仏］法を好まない大きな権力を持つ大臣たち」［*DM*S:24a.4-5］という表現が見える。一方，タクダ・ルコンはラサ北部ペンユル出身のゲンラム氏から出た人物であり，763年にチベット軍が長安を一時占領した際に指揮を執った人物とされる。彼の名は，前述のショル碑文（前掲註107）にはペンユル〔'phan yul〕のゲン・タクダ・ルコン〔ngam stag sgra klu khong〕と記されている。

W.D.シャカッパは，タクダ・ルコンは王に忠誠心篤い大臣であったが，タクラ・ルコンはポン教徒であり，これまで多くのチベットの歴史家たちが両者を混同してきたと指摘しており（W.D.シャカッパ著・三浦順子訳『チベット政治史』亜細亜大学アジア研究所，1992，41頁），またトゥンカル・ロサンティンレーも両者は別人であると主張している（dung dkar blo bzang 'phrin las, *dung dkar tshig mdzod chen mo*［东噶・洛桑赤列編纂『东噶藏学大辞典』中国藏学出版社］，2002，p.999）。更に『賢者喜宴』［*KhG*:372.17, 21］にも，サムイェ寺建立後に崇仏勅命書に署名した人物として，タクダ・ルコンとルコン大臣という二人の名前が挙げられており，古密呪派の史書である『イェシェ・ツォゲルギ・ナムタル』にも「二人のタクラ・ルコン」［*YTsh*:154.9-10］という表現がみられる。だがチベットの史書に頻繁に見られるスペルの誤りを考慮に入れれば，両者は途中で宗教的信条を変えた一人の人物であったという可能性も検討されなければならないだろう。

159) 前掲註127参照。

160) ［*KhG*:310.7-8］では「マシャンのティム・ブチュンにより，死者にツェを為せば独身のまま永遠に追放され［るのであり］，南ネパール〔lho bal〕の神を崇拝してはならないということを聞いていないのか」とする。

161) 〔rgya phrug 'dzangs pa〕［*Bzh A*:11.4］，〔rgya phrug *MDz*angs pa〕［*Bzh B*:12.8-9］。後者を採った。［*KhG*:307.23-308.1］に依れば「勇敢にして賢明なる中国の子」とは，サンシが中国から帰国した際にその業績をたたえて与えられた称号である。

162) 〔'phangs〕［*Bzh A*:11.5, *Bzh B*:12.9］。〔phangs〕の異体ないし誤記を解した。

［それに依れば，サンシは］シャンシュンに派遣されたのである[163]。

2.15 シャーンタラクシタの招聘 ［*Bzh A*:11.8-13.2, *Bzh B*:12.14-9］

また，マンユルの地方官に赴任したセーナンは［マンユルに留まることなく，そのまま］まっすぐインドへ向かい，シャン・マシャンの言を破って，マハーボディ〔ma hA bho dhi〕[164]とシュリーナレントラ〔sri na len tra〕[165]を供養し，布施を捧げ，インドの仏堂・精舎[166]を供養した。［すると，］冬［に］雨が降り[167]，菩提樹の葉が落ちて光が生じ，空には「善哉」〔dge'o〕という声が生じた。［セーナンは］あらゆる賢者のもとで［仏］法を学んだ［後］，ネパールにやってきて，ネパールの王〔rje〕に助力を求め，賢明なるシャーンタラクシタをマンユルに招き，［マンユルに］2つの経堂を建て，［経堂の運営に必要な］経費を得た。［そして］アツァリヤ〔a tsarya〕［=阿闍梨シャーンタラクシタ］に布施を捧げ，［チベットで法を説く］発心をお願いしたところ，［シャーンタラクシタは］「私に布施を捧げよ」と仰った。［そこで，セーナンは］金銀などの宝と，軟膏[168]と茶匙と，羊毛の衣・緞子・兜をすべて差し上げた。［するとシャーンタラクシタは，］「もっと［私に布施を］捧げよ」と仰った。［しかし，バ・セーナンにはもう捧げる物が］何も無くなってしまったので，身につけていた帯[169]と羽織も捧げた【*Bzh A*:12】［ところ，シャーンタラクシタは］発心した。そして［シャーンタラクシタは，セーナンが］呈上したものを再びこちらに下さったのち，「汝は今生において［初めて私と］面識をもっただけでなく，多くの生の前から［=ずっと前の世から］発心した高弟であることにより，汝の名も［将来に］イェシェ・ワンポ〔ye shes dbang po〕というものになるであろう[170]」と仰った後，［バ・セーナンの］頭を撫でた。

セーナンの家でお食事を召し上がった後，［セーナンは］「阿闍梨よ，チベットへ至り，何とぞチベットの贊普の善友となってください」と申し上げた。すると［シャーンタラクシタは］「私はチベットを教化する縁を持つ者である。チベットの聖なる贊普と汝が［まだ今生におい

---

163) 〔blon po kun gyi sang shi /'di na sang shi zhang zhung nas skor blang ba'i lo rgyud bris 'dug pa de gzhan la 'dug /dpe gzhan na 'dug/ cong lung du skor blang du btang〕［*Bzh A*:11.7-8, *Bzh B*:12.12-14］。〔blon po kun gyis sang shi /'di na sang shi zhang zhung nas dkor blangs pa'i lo rgyud bris 'dug pa de gzhan la 'dug /dpe gzhan na 'dug/ zhang zhung du dkor blang du btang〕の意に解した。この一文は注記のようにも見える。『賢者喜宴』ではサンシが中国から帰国したのち，王命によってシャンシュンに派遣されたという記述が見える（後掲註184参照）。

164) ［*PCh*:184.20］は〔ma hA twa bho dhi〕，［*PG*:55.9］は〔byang chub chen po〕とする。

165) ［*PCh*:184.20］は〔shrI nA len+dra〕，［*KhG*:306.7］は〔nA len+ta〕，［*PG*:55.9］は〔na len+dra〕とする。

166) 〔rgya'i sten khang dpe har〕［*Bzh A*:11.10, *Bzh B*:12.17］。［*KhG*:306.9］では〔hen khang〕とする。

167) 〔rgun char bab〕［*Bzh A*:11.11］，〔dgun char bab〕［*Bzh B*:12.17］。後者を採った。

168) 〔zo ri〕［*Bzh A*:11.15, *Bzh B*:13.2］。顔などに塗る上質な軟膏を意味する〔zo ris〕の異体ないし誤記と解した。

169) 〔skye rag〕［*Bzh A*:11.16, *Bzh B*:13.4］。〔ske rags〕の異体ないし誤記と解した。

170) イェシェ・ワンポはバ・セーナンの受戒後の名である。従ってこの一文にはシャーンタラクシタによる予言という性質がある。

て］生を受けておらず，［前世において］9回ずつ生を受けている間[171]，私はネパールとサホルを行き来してきた。今や，聖なる贊普と汝の二人も成長し［私がチベットを教化するのに適切な］時期に至ったので，私がチベットの聖なる贊普の善友となる。そこで［私はチベットの贊普に］，チャルカル国[172]のローヒタ河[173]の岸，ヘーポリ山[174]の前の吉兆なるダクマル［の付近に］‘不動にして自然成就せる思量を超越せるもの’[175]という［名の］経堂を一つ建立して下さるようお願いする」と仰った。［そして］阿闍梨［=シャーンタラクシタ］は再びネパールに去った。［その後，］セーナンはネパールでバセ[176]を為し，必要な経費を得て法を学んだ。

［そして，］セーナンは下に［=チベットに］やってきてルンツブ宮殿[177]に行き，王に拝謁する［ために］使者を送ったところ，［王は］朔日に接見するという御言葉を下さった。その後，［セーナンが］王〔rgyal po〕を表敬訪問【*Bzh B*:14】したところ，王〔rje〕は「セーナンよ，汝は［仏］法だけを行っているというが，罰を受ける恐れはないのか」と仰った。［セーナンは］応えて「小生はマンユルのトゥー［地方］に居りますので[178]，追放されたも同然でございます。」と仰った。王は［セーナンに］残飯[179]を下賜した後，［話を聞かれないように］ある閑所に［行っ］て，［セーナンが王に］良き神法を為す族［である］シャーンタラクシタという賢者がいるという話を詳しくご相談申し上げたところ，王は「汝を，［仏］法を【*Bzh A*:13】迫害する全ての尚論が殺しに行くであろうから，［今は］国[180]に去って隠れて居なさい。私はシャン・ニャサン[181]に［秘密裏に命じて尚論の会議の場で[182]］徐々に要求させるのである[183]」と仰った。

---

171) ［*KhG*:306.22］では「チベットの王統が9［度］替わる間に」〔bod kyi rgyal po gdung rabs dgu brjes kyi bar du〕とする。

172) 〔yul byar dkar〕［*Bzh A*:12.8, *Bzh B*:13.15］。不明。

173) 〔chu bo lo hi ta〕［*Bzh A*:12.8, *Bzh B*:13.15, *Bzh C*:6a］。［*KhG*:307.1-2］では〔chu bo lo hi ta〕。恐らく赤い（lohita）川の意であり，ブラフマプトラ川を指すと思われる。

174) 〔ri khas po ri〕［*Bzh A*:12.8］，〔ri has po ri〕［*Bzh B*:13.16］。後者を採った。前掲註156参照。

175) 〔bsam yas mi 'gyur lhun gyi grub pa〕［*Bzh A*:12.8-9］，〔bsam yas mi 'gyur lhun gyis grub pa〕［*Bzh B*:13.16-17］。後者が正しい。チベット初の本格的大僧院とされるサムイェ寺を指す。

176) 〔sba se〕［*Bzh A*:12.10-11, *Bzh B*:13.18-19］。［*KhG*:306.8-9］は「ネパールではサルワ・ワセの祭が行われた」〔bal yul du ston mo sarba wa se bgyis〕とする。〔sba se〕及び〔sarba wa se〕は何らかの儀式を指すと思われるが仔細不明。尚，『賢者喜宴』では，ネパールでこの〔sarba wa se〕が行われたのは，セーナンがシャーンタラクシタに入蔵を求めるよりも先の出来事であったとしている。

177) 〔pho brang rlung 'tshub〕［*Bzh A*:12.11］，〔pho brang rlung 'tshubs〕［*Bzh B*:13.20］。

178) 〔kho bo mang yul gyi kha dod na mchis pas〕［*Bzh A*:12.13-14, *Bzh B*:14.2-3］。〔mang yul gyi stod na mchis pas〕［*KhG*:307.13］の意に解した。

179) 〔pham 'babs〕［*Bzh A*:12.14, 14.4］。セーナンに対する処遇を廃仏派勢力に示すための行為と思われる。

180) セーナンの故郷であるバラムのラクを指すと思われる。前掲註128）参照。

181) 〔zhang nya bzang〕［*Bzh A*:13.1, *Bzh B*:14.8］。崇仏派の大臣であり，後述するマシャン・ドムパキェの生き埋め事件に関与した人物とされる。『賢者喜宴』では〔sna nam khri bzungs nya bzang〕［*KhG*:379.4-5］，『プトゥン仏教史』の翻訳官のリストでは〔zhang rgyal nyen nya bzang〕［*PCh*:208 (32)］，『デゥ宗教史』では〔sna nam rgyal nyer bzangs〕［*KhDC*:265.18］とも呼ばれる。恐らくナナム氏出身の大臣であり，それ故シ

セーナンはしばらくの間，国に去った。[184)]

2.16 マシャン・ドムパキェの失脚 ［*Bzh A*:13.2-15.3, *Bzh B*:14.9-16.14］

［その後,］贊普がシャン・ニャサンやティサン[185)]などの［仏］法を好む全ての大臣たちと［仏］法を行うことについて話し合っていたところ，シャン・ニャサンが「シャン・マシャン［=マシャン・ドムパキェ］が［仏］法を悪しき廃物として嫌うために，［王の］ご意向が叶わないのでございます」と言った。［グー・］ティサン大臣は「そのための方策として役立つので，私に従って［私の］靴底［をお作りになられよ］[186)]。その後で王〔rje〕の意趣を成就するのである」と言って，［その］通りに決まった[187)]。

ャンの名を冠されると思われる。

182) ［*KhG*:307.307.19］の記述〔lkog tu bsgo ste zhang blon 'dun sar〕により訳文を補った。

183) 〔khad kyi gsol du bzhugs go〕［*Bzh A*:13.1-2］，〔khad kyi gsol du gzhug go〕［*Bzh B*:14.8］。〔khad kyis gsol du gzhug go〕の誤記と解した。

184) ［*KhG*:307.21-308.1］に依れば，この直後にサンシが中国から３つの経典を持って帰国し，使者としての業績を讃えられ，「勇敢にして賢明なる中国の子」〔rgya phrug mdzangs pa〕という称号（前掲註161参照）を得たとされる。また同書には，王はこの後，シャンシュンに派遣した使者たちが未だ一人も帰って来ないと言って，サンシをシャンシュンに派遣したところ，サンシが道中，シャンシュンの神ムツァメン〔mu tsa men〕に遭遇したという逸話が記されている（［*KhG*:308.2-20］）。

185) 〔khri bzang〕［*Bzh A*:13.3, *Bzh B*:14.9］。グー・ティサン・ヤプハク〔'gos khri bzang yab lhag〕を指す。ティソン・デツェン王の時代，仏教導入事業に多大な貢献を果たしたとされる他，税制や法律を整備したことでも知られ，敦煌文書［BM.8212.187.112］には，763年にこの人物が宰相〔blon che〕に就任したという記録も見える。多くの仏教史書が彼を篤信の仏教徒として記録するが，一部のポン教史家は，彼はポン教徒か，或いは少なくとも仏教とポン教の何れにも偏らない人物であったと主張している。例えばポン教の学僧シャルザ・タシギェルツェン〔shar rdza bkra shis rgyal mtshan, 1859-1935〕は『善説蔵』〔*legs bshad mdzod*〕の中で，ポン教徒と仏教徒が宗論を行った際，グー・ティサン・ヤプハクは論争を見守る証人として中立の立場を守ったとしており，またティソン・デツェン王がインドから僧侶を招きたいと大臣たちに相談した際，グー・ティサン・ヤプハク は「嘗ての38代の王統を遡っても，正法［=仏教］の恩恵など在ったことはありません」［*LDZ*:209.7-14］と言って反対したとされる。

186) 〔de la thabs kyi bar sngo thog/ kho bo'i rjes su gting gnon〕［*Bzh A*:13.5, *Bzh B*:14.13］。［*KhG*:311.10-11］では〔de la thabs bgyi bar rngo thog gis kho bo'i rjes su rting gnon MDzod cig〕，［*PCh*:185.4］では〔thabs bgyi bar rngo thogs/ kho bo'i gting gnon slad kyis mdzod cig〕。〔de la thabs bgyi bar rngo thog/ kho bo'i rjes su rting gnon〕の誤記と解した。

187) ここではマシャン・ドムパキェを追放する方策のみが論じられているが，［*DMS*:25.3-5］には「…王［=ティソン・デツェン］が成長した時，［仏］法［を好む］大臣であるグー・ティサン〔'gos khri bzang〕とシャン・ニャムサン〔zhang nyam bzang〕などと話し合って［仏］法を行うべきこと論じていた時，ニャムサンは‘他の2人の大臣の権力が強いので［それは］実現できない’と言った。［これに対し］グー［・ティサン］は‘実現する方法はある。小生の靴底をお作りになられよ’と言った」とある。ここで「他の2人の大臣」〔blon po gzhan gnyis〕とはマシャン・ドムパキェとタクラ・ルコン（前掲註158参照）を指す。

［グー・］ティサンは，上下の卜者〔phyag sprin〕と女性の占い師〔mo ma〕と観相師〔bltas mkhan〕の全てに秘密裏に褒美を与えた[188]のち，「王子は染汚が多く，［それは］政治に害を与えることになろう」という共通した予言を口にさせ，［さらに，］それに対してどのようにすべきかという予言を言わせて，“王〔rje〕のリムド［として］，有力な尚論を一組［選び，彼らを］3年間[189]，墓で過ごさせれば，王の御寿命は延び，政治は栄えるであろう”という予言を言わせた。［その後，］それはあらゆる所で頻繁に話し合われた。

さらに［グー・］ティサン大臣は［人々に命じて］道を行き交う旅人たち[190]に聞こえるように「シャン・マシャンが重い病気にかかっているというあの話は【*Bzh B*:15】本当だ」と言わせた。マシャンはそれ［=その話］を聞き，心が打ち砕かれた[191]。［また］西方の一人の老婆が尚論［=マシャン・ドムパキェ］の顔を凝視し，「シャン・マシャンは王〔rje〕の代理であり，チベットの全国民にとって重要であるが，重い病に罹っているというのは本当であろうか」と言ったので，シャン・マシャンはそれが間違いなく本当だと思い，自分の家で落ち込み，臥して泣いた。［その様子を見て，マシャンの家の］下女[192]が「偉大なるマシャンが泣くとは，いったいどんな過ちをおかしたのですか」と言った。［するとマシャンは］「国民が皆，私が重い病気にかかっていると話しているからだ」と言った。［下女は］「国民の話を気にすることはありません，本当ではありません」と言ったので，シャン［・マシャン］が鏡[193]を見たところ［老いていたので[194]］「国民【*Bzh A*:14】の口に智慧の眼があるというのは本当である」と言って，悲しみを深くした。

そのことを［グー・］ティサン大臣が聞いて，王と臣下がみな集まった時，シャン・ニャサンが「王子の大きな染汚を取り除くリムドを行うべきである」と要求したところ，ティサン大臣は「王［子］の身代わり[195]［の儀礼］を行うべきである」と詳しく述べた。そして，［シャン・ニャサンが］「では，王［子］のお世話をする者[196]［として］誰が偉大と認められるだろうか」と言ったところ，グー・ティサン大臣が，「王［子］のお世話をする者［として］は，私

---

188) 〔btsal〕［*Bzh A*:13.7, *Bzh B*:14.16］。〔bstsal〕の誤記と解した。

189) ［*PG*:55.16］では「三ヶ月間」〔zla ba gsum〕とする。

190) 〔shul la 'grim pa'i mgron po rnams〕［*Bzh A*:13.10, *Bzh B*:14.20-21］。［*KhG*:311.17］の記述〔bshul lam 'grim pa'i mgron po rnams〕に依った。

191) 〔blo ba la bcags par gyur〕［*Bzh A*:13.12, *Bzh B*:15.2］。〔glo ba la bcag par gyur〕の誤記と解した。

192) 〔byan mo〕［*Bzh A*:13.14, *Bzh B*:15.6］。妻の意もあるが，食事などの世話をする下女を意味する場合もある。［*KhG*:311.22］は「供回り（家来）」〔nang 'khor ba〕としている。

193) 〔zhang gi me long〕［*Bzh A*:13.16, *Bzh B*:15.8］。〔zhang gis me long〕の誤記と解した。

194) ［*KhG*:312.1-2］の記述〔rgas 'dug pas〕により訳文を補った。

195) 〔sku glud〕［*Bzh A*:14.3, *Bzh B*:15.12-13］。特定の人物の厄災を人型などに移して浄化する儀礼を言う。この種の「身代わり」を用いて行われる儀礼には様々なものがあるが，その一つである「死を欺く」〔'chi bslu〕と呼ばれる延命儀礼については，拙稿「チベット人の死生観―「死を欺く」儀式と３つの生命」（『死生学研究』東京大学人文社会系研究科，2003年，pp.56-73）参照。

196) 〔zhabs stog〕［*Bzh A*:14.4-5, *Bzh B*:15.13, 14］。〔zhabs tog〕の異体ないし誤記と解した。

が［最も］偉大である。子孫の善［と］イクツァン[197]においてもそれ［=自分］が偉大である。私より偉大な大臣など誰がいようか？［王の身代わりは］私が一人でしよう。」と言った。［すると］シャン・マシャンが，「私よりも偉大な大臣は居ない。ならば［私が］一人で王のお世話をする」と主張した。［また，］墓を何処に建てるかということが話し合われ，グー［・ティサン］が「パクリ〔phag ri〕にするか，或いはジュのパンサン〔'ju'i spang bzang〕にしよう」と言ったところ，シャン・マシャンは「ナナム・ダクプ[198]に建てる」と言った。［そして，墓の］基礎を囲むと，マシャンは「ガーモナより石を運べ」と言った[199]。水害の対策をし，［空腹を満たすための食物，凍えないための衣服（を容易し），閉じこめられないための隙間を作っ[200]］た。

墓[201]が完成したのち，二人の大臣【*Bzh B*:16】が中に入らざるを得なくなったとき，ロテグ・ナゴン[202]とグーゲン［=グー・ティサン］が話し合い，［グー・ティサンは］足に鷲の靴をはき，体には馬勃[203]の外套[204]を身につけた。そして［グー・ティサン］宰相〔blon chen po〕とシャン・マシャンが中に入った時，［グー・ティサン］宰相は［ロテグ・ナゴンに］「入り口を閉ざすな」と言い，［さらに］「ここをシャン［・マシャン］の寝床とするのである。ここには私の鳥を，ここには水を置きなさい」と言って［墓の中に］進んだ。マシャンは怯えながら[205]後について行った。［グー・ティサンが］手を叩き「あれは何だ！」と言って逃げると，［マシャンは驚いて］逃げた者［=グー・ティサン］の足につかまった。すると一掴み[206]の鷲の毛が手の

---

197) 〔bu tsha'i dge yig〕［*Bzh A*:14.5, *Bzh B*:15.15］。［*KhG*:312.6］の記述に基づき〔bu tsha'i dge dang yig tshangs〕の意に解した。〔yigs tshang(s)〕は古代チベットにおける褒状制度を指す。前掲註152参照。

198) 〔sna nam brag phug〕［*Bzh A*:14.8, *Bzh B*:15.19］。［*KhG*:312.10］では〔sna nam brang bu〕。

199) 〔dmangs bres bas ma zhang gis gsung nas rdo dga' mo sna nas skyos gcig zer〕［*Bzh A*:14.8-9, *Bzh B*:15.19-20］。［*KhG*:312.11］の記述に基づき〔rmang bres pas ma zhang gis rdo dga' mo sna nas skyes shig zer〕の誤記と解した。

200) ［*KhG*:312.12］の記述〔mi ltogs pa'i zas mi 'khyag pa'i gos mi subs pa'i gseng la sogs pa byas〕によって訳文を補った。

201) 〔'chad pa〕［*Bzh A*:14.9-10］，〔mchad pa〕［*Bzh B*:15.21］。後者を採った。

202) 〔lo ste gu sna gong〕［*Bzh A*:14.10］，〔lo ste gu na sna gong〕［*Bzh B*:16.1］。［*KhG*:312.15］では〔lo te gu snang gong〕。

203) 〔pha ba mgo dgu〕［*Bzh A*:14.11］，〔pha ba dgo dgo〕［*Bzh B*:16.2］。後者を採った。［*KhG*:312.16, 20］では〔pha ba go go〕。ホコリタケの一種で，胞子を飛散させるキノコを指す。この胞子を飛散させることによってマシャン・ドムパキェの視界を塞ぐ効果をねらったものと思われる。

204) 〔thul pa〕［*Bzh A*:14.11］，〔thul ba〕［*Bzh B*:16.3］。前者を採った。内側に動物の毛皮が張られた半月形の外套・マントを指す。

205) 〔tril li li〕［*Bzh A*:14.13］，〔tri la li li〕［*Bzh B*:16.6］。［*KhG*:312.18］では〔kri le le〕。怯える〔khri le ba〕様子を表す擬態語と思われる。

206) 〔spa ra gang〕［*Bzh A*:14.15, *Bzh B*:16.8］。〔spar gang〕の異体ないし誤記と解した。［*PG*:55.18-19］には「マシャンが手を伸ばしても一掬量〔snyim pa gang〕の鷲の毛〔rgod spu〕しか取れなかった［=グー・ティサンを捕まえることはできなかった］」とある。

中にあった。［更に］馬勃［から飛散する胞子］によって眼は何も見えないので，グーゲンが「［何者かに］喰われた！」と唸った［ところ，］ロテグ［・ナゴン］が入り口を岩で覆った。長らくして，鶏【*Bzh A*:15】の声が響いた後，洪水だと思って［驚いた］ラバ・兎などの家畜が［ロテグ・ナゴンが］手を叩いたところを掘ったので[207]，水が入らないようにするために作った囲いの壁が壊れた。［その後，マシャンは墓の］中から手紙を書いて矢に［付けて］，「ナナム氏よ，私を［ここから］掘り起こせ」というもの［=手紙］を外に打った。そこでマシャンに罰を与えるという勇敢な行為は成功した[208]。

文献略号

B.M. : *tun hong nas thon pa'i bod kyi lo rgyud yig cha*（王尧陈践译注『敦煌本吐蕃历史文书（增订本）』，民族出版社），1992，pp.29-33）

Bzh A : *Une chronique ancienne de bSam-yas, sBa-bzed*, edition du texte tibetain et resume francais par R.A. Stein, Institut des hautes etudes chinoises : Adrien-Maisonneuve, 1961.

Bzh B : sbyin pa rgya mtsho (ed.), *btsan po khri srong lde btsan dang mkhan po bo dhi sa twa slob dpon padma'i dus mdo sngags so sor mdzad pa'i sba bzhed zhabs btags ma*, Delhi: bod gzhung sehs rig dpar khang (Sherig Parkhang, Tibetan Cultural & Religious Publication Centre) , 1996 [1968]

Bzh C : Pasang Wangdu and Hildegard Diemberger, *Dba bzhed : the royal narrative concerning the bringing of the Buddha's doctrine to Tibet*, Verlag der Osterreichischen Akademie der Wissenschaften, 2000.

DCh（『ドゥジョム宗教史』）: bdud 'joms 'jigs bral ye shes rdo rjes, *bdud 'joms chos 'byung*, si khron mi rigs dpe skrun khang（杜钧· 益西多吉『杜钧教史』四川民族出版社）, 1996.

MDz: ko zhul grags pa 'byung gnas, rgyal ba blo bzang mkhas grub, *gangs can mkhas grub rim byon ming MDzod*, kan su'u mi rigs dpe skrun khang（郭须・扎巴军乃，嘉娃・罗桑开珠编『雪域历代名人辞典』甘肃民族出版社）, 1992.

DM（『紅史』）: tshal pa kun dga' rdo rje, dung dkar blo bzang 'phin las (ed.), *deb ther dmar po*, mi rigs dpe skrun khang, 1985.

DMS（『新紅史』）: gsod nams grags pa, *deb ther gsar ma* (Giuseppe Tucci (ed.), *deb t'er dmar po gsar ma: Tibetan chronicles by bSod nams grags pa*), Serie Orientale Roma 24. Rome: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo

---

207) 〔chu shor snyam te dre'u yos zan lag pa brdungs pa'i sar bskos pas〕［*Bzh A*:15.1, *Bzh B*:16.10-11］［*KhG*:312.22-23］は〔chu shor snyam de'u yos zan lag pa brdung ba'i sar brkos pas〕とする。〔chu shor snyam de'u yos gzan lag pa brdung ba'i sar brkos pas〕の誤記と解した。

208) マシャンはこうして王の陵墓の側で“生ける屍”として生きることを余儀なくされたと伝えられる。この“生ける屍”は当事者の絶命を必ずしも意味するものではなく，文字通り“生きたまま死者”となり，生き物との接触を断たれて，陵墓の財宝を管理する職務に任ぜられた者のことをいうらしい。この任務は必ずしも珍しいものではなく，権力闘争に破れた者や，能力の劣った大臣がしばしばこの名誉ある職務を任されたと伝えられており，『王遺教』〔rgyal po bka'i thang yig, in: bka' thang sde lnga, mi rigs dpe skrung khang［歐堅朗巴掘自雅隆石窟，多吉杰博整理『五部遺教』民族出版社］, 1990[1986], pp.145-147〕にも記述が見られる。尚，マシャンは生き埋めにされた陵墓の場所について［*DNg*:68.3, *DMS*:25.5］ではトゥールン〔stod lungs〕としている。

Oriente, 1971.

DNg（『青史』）: 'gos lo tsA ba gzhon nu dpal, *deb ther sngon po*, wA Na badzra bidyA dpe mdzod khang (Vajra Vidya Institute, Sarnath, Varanasi, India), 2003.

KhDC（『デゥ宗教史』）: mkhas pa lde'u (lde'u jo sras), *mkhas pa lde'us mdzad pa'i rgya bod kyi chos 'byung rgyas pa*, bod rang skyong ljongs spyi tshogs tshan rig khang bod yig dpe snying dpe skrun khang (ed.), bod ljongs mi dmangs dpe skrun khang（弟吴贤者著『弟吴宗教源流』西藏自治区社会科学院西藏古籍出版社编，西藏人民出版社），1987.

KhG（『賢者喜宴』）: dpa' bo gtsug lag phreng ba, *chos 'byung mkhas pa'i dga' ston* (stod cha), wA Na badzra bidyA dpe *MDz*od khang (Vajra Vidya Institute, Sarnath, Varanasi, India), 2003.

LDZ: shar rdza bkra shis rgyal mtshan, rdo rje rgyal po (ed.), *legs bshad rin po bhe'i gter mdzod*, mi rigs dpe skrun khang（夏察扎西坚『西藏本教源流』民族出版社）, 1985.

ML: sa skya bsod nams rgyal mtshan, *rgyal rabs gsal ba'i me long*, mi rigs dpe skrun khang （萨迦· 索南坚赞『西藏王统记』民族出版社）, 1981.

NPh: Nyi ma bstan 'dzin , *sangs rgyas kyi bstan rtsis ngo mtshar nor bu'i phreng ba*（Per Kvaerne, *A Chronological Table of the Bon po: The Bstan rtsis of Nyi ma bstan 'dzin*, Acta Orientalia, vol. 33, 1971, pp.205-285）

PCh（『プトゥン宗教史』）: bu ston rin chen grub, rdo rje rgyal po (ed.), *bu ston chos 'byung gsung rab rin po che'i mdzod*［*bde bar gshegs pa'i bstan pa'i gsal byed chos kyi 'byung gnas gsung rab rin po che'i MDzod*］, krung go'i bod kyi shes rig dpe skrun khang（布頓仁欽竹著，多吉杰博編『布頓佛教史』中國藏學出版），1988.

PG（『西藏王臣記』）: rgyal dbang lnga pa chen mo, *bod kyi deb ther dpyid kyi rgyal mo'i glu dbyangs*, mi rigs dpe skrun khang, 1991［1957］（第五世達賴喇嘛著『西藏王臣記』民族出版社，1991［1957］）

PJ（『パクサム・ジュンサン』）: sum pa mkhan po ye shes dpal 'byor, *dpag bsam ljon bzang* (Sum-pa-mkhan-po Ye-ses-dpal-ḥbyor: Dpag-Bsam-Ljon-Bzaṇ : of Sum-pa-mkhan-po Ye-ses-dpal-ḥbyor / edited by Lokesh Chandra ; with foreword by G. Tucci ; and a preface by L. Petech, Śata-Piṭaka series. Indo-Asian literatures ; vol. 8), International Academy of Indian Culture, 1959.

P.T.: *tun hong nas thon pa'i bod kyi lo rgyud yig cha*（王尧陈践译注『敦煌本吐蕃历史文书（增订本）』，民族出版社），1992，pp.12-29）

RTs: gu ru bkra shis (ngag dbang blo gros), thub bstan 'od gsal bstan pa'i nyi ma (ed.), *bstan pa'i snying po gsang chen snga 'gyur nges don zab mo'i chos kyi byung ba gsal bar byed pa'i legs mkhas pa dga' byed ngo mtshar gtam gyi rol mtsho*, bod ljongs mi dmangs dpe skrun khang（土登维色旦白尼玛『宁玛教派源流』四川民族出版社）, 1992.

YTsh: stag sham rdo rjes gter nas bton, *mkha' 'gro ye shes mtsho rgyal gyi rnam thar,* si khron mi rigs dpe skrun khang（达夏多吉『益西措吉传』四川民族出版社）, 1989.